

特集：公開シンポジウム「内陸アジア史研究の課題と展望」

内陸アジア史研究の新潮流と世界史教育現場への提言

森安 孝夫

* 2010 年 11 月 13 日の内陸アジア史学会 50 周年記念シンポジウム当日の私の講演タイトルは「モンゴル時代までの東部内陸アジア史：実証研究から世界史教育の現場へ」であったが、本稿は読者として高校世界史教員と大学受験問題を作成する大学教員、さらにそれを目指す院生・学生の三者を意識した増補修正版であるため、タイトルにも変更を加えた。

I. 問題提起

我が国の東洋史学の置かれた現状は、白鳥庫吉・那珂通世・桑原隲藏・内藤湖南などといった明治の先学以来、昭和後期の我々の先生方（私の場合は榎一雄・護雅夫・池田温）の頃までの古き良き時代の状況とは大きく異なっています。明治から昭和前期にかけては、欧米列強に追いつき追い越せという日本全体の雰囲気の中で、東洋史学、とりわけその中核を占めた内陸アジア史学の社会的存在理由には大きなものがありました。司馬遼太郎の『坂の上の雲』に描かれる時代状況なり個人意識は、歴史学という学問の世界にも通底していたのです。ところが戦後は、東洋史学や内陸アジア史学が大日本帝国の朝鮮・満洲・北中国をはじめとするアジア侵略や植民地支配に加担したと厳しく指弾されたため¹、どちらかという政治とは距離を置き、国家や社会に直接貢献しなくてもいいという風潮が強くなりました。江上波夫・松田壽男・榎一雄ら戦前・戦後を研究者として生き抜いた世代は、古代史から眺めた時の西洋に対する東洋の優位を説きつつも、歴史学は政治や国家に直接奉仕するものではなく、人類共通の基礎的教養作りに役立てばいいものであって、そのために地道な実証研究に大きな価値があると考えていたように思われます。私の学生時代、マルクスの唯物史観ならびにソ連の中央アジア史学の影響を相当強く受けながらも、明治以後欧米の研究者と互角にわたりあって日本の内陸アジア史学を発展させていった白鳥以下の先駆者たちの伝記を感動しながら読みふけり、自分も先学に倣って fact-findings に努力して教授となり、それから後進を育てて行けば、前途洋々であると信じていました。従って、まさか現在のように内陸アジア史学が存亡の危機に陥るとは夢にも思いませんでした。

しかしこの 20 年ほどで状況は激変しました。内陸アジア史学どころか東洋史学全体が危機に立たされているのです。歴史学自体は状況がどんなに悪くなくても残りますが、その中心は西洋史と

1 東洋史学の成立と発展、そこに占める内陸アジア史学の位置、さらに戦後歴史学から見た戦前の東洋史学批判などについては、関連文献はあまりに多く、いちいち挙挙できない。ここには、近年の注目すべきもの 1 点のみを紹介しておく：吉澤誠一郎「東洋史学の形成と中国——桑原隲藏の場合」、岸本美緒（編）『岩波講座「帝国」日本の学知 第 3 巻 東洋学の磁場』岩波書店、2006、pp. 54-97。

日本史と中国史だけ、つまり100年ほど時計の針が逆戻りする恐れがあるのです。かつて「敦煌は中国にあれど敦煌学は日本にあり」として中国の学者を嘆かせた状況は一変し、今や敦煌学の中心は中国に移り、日本では先細り状態です。それと同じく東洋史学全体でも近い将来、史料も人材もポストも中国にかなわなくなる恐れが大きいのです。加えて、目下政治的理由から「中華民族」を形成中の中国はもちろん、ソ連崩壊後のモンゴル国もキルギス・カザフスタン・ウズベキスタン等といった旧ソ連領中央アジア諸国も、それぞれの立場からまだ何十年かは国民史（国民国家の歴史）の形成をめざし続けることでしょう。このような新たな状況の中、日本で内陸アジア史の研究・教育を担当する我々は、何を問題とし何を主張していけばよいのでしょうか。

19世紀から20世紀半ばにかけて、あれほど隆盛を誇ったヨーロッパの東洋学は、レヴィストロースの文化人類学や社会科学、あるいはアメリカ流の非歴史主義的な地域研究によって駆逐され、今や見る影もなくなりました。今年の『史学雑誌』「回顧と展望」号の「総説」でインド史の水島司・東大教授は、「私の知るアジアの地域名を冠した諸学会での会員数に占める歴史研究者の割合は、この間、急速に落ちてきている」として、歴史学が地域研究に押されて、その相対的地位を低下させている現状を嘆いています。今ここで我々の社会的な存在意義を主張できなければ、内陸アジア史学は本当につぶれてしまいます。ここにお集まりの皆さんにどれほど危機意識がおりなのかは分かりませんが、高大連携を先進的に進めて来た我々大阪大学の教員は、強い危機意識を共有しています。我々は、2002年に21世紀COEの一環として開催した全国高等学校世界史教員研修会に始まり、今年夏の大阪大学歴史教育研究大会に至るまで、全国から参加された多数の高校教員と接触する中で、さまざまなことを考えさせられました。本日、私が紹介する高校教員の意見は、全て今夏の3日間の大会後に提出されたレポート、あるいは、それに先立つ月例会でのコメントによるものです。高校の世界史離れは想像以上で、このままでは高校世界史教員の数が減らされるだけでなく、大学の東洋史学科への進学者も激減し、ひいては東洋史教員ポストも減らされ、後進を育てられなくなるという負の連鎖が起こりかねないのです。

いまさら言うまでもなく、我々の目指すべき歴史学は、先学の残した業績と伝統を踏まえ、政治に左右される正義や善悪という価値判断から自由な、真実を探究する個別的な実証研究センターであるべきです。しかしながら、大前提のない個別研究だけでは、学問の世界のみならず現代社会の中で埋没してしまう恐れが大きいのです。つまり人文科学である歴史学は、実証研究だけをやっていただけでは、現代社会を把握するという点ではライバル関係にある社会科学に勝てず、ますます研究者のポストが減らされてしまうでしょう。とはいえ、社会科学は冷戦の終焉を誰も予想できなかったし、経済学はリーマンショックとその後の世界不況を予想できなかったではありませんか。これまではポストが半ば自動的に保証されて自己主張する必要を感じなかった歴史学界も、ここで攻勢に出なければなりません。ポスト減は些末な問題などではなく、むしろ歴史学界にとって死活問題なのです。歴史学は、未来を予想する学問ではありませんが、人類史を振り返れば人種にも民族にも優劣はなく、偏見と差別に学問的根拠がないことを人々に伝え、現状変革のため地に足の着いた議論をする知恵を提供する「実学」であることを、研究者も教育者も自信を持って強調して欲しいの

です。かつて歴史学は過去の歴史から「学ぶ」ものと言われましたが、そうではなく、長期的に過去から眺めなければ国際情勢の現状分析さえ不可能なのです。

さて本日の私と堀川徹教授の基調報告は、短い時間ですから明治以後百数十年の学界を回顧するのではなく、主に戦後でも最近20年ほど（ソ連崩壊以後）に絞られます。おおまかに前近代を私が、近代を堀川氏が担当しますが、我々2人でカバーできない分野については、後で林俊雄・稲葉穰・森川哲雄・中見立夫・小松久男の諸氏に補っていただきます。

私の場合は、まず最初に内陸アジアないし中央ユーラシアという枠組みの見直しと再定義をおこない、次いで最近の20余年間に顕著な進展を見せた研究領域を紹介し、最後に今後の内陸アジア史学の社会的存在意義をアピールする方向性についての問いかけをします。

Ⅱ. 「中央ユーラシア」と「内陸アジア」の定義の変遷

東アジア・南アジア・西アジア・北アジア・中央アジアという単純な区分は、互いに排他的であり、現実には合いません。山川出版社の世界各国史シリーズの『北アジア史』は確かに名著でしたが、我が国における歴史の研究・教育の双方に多大の影響力を持ってきたこの世界各国史シリーズにおいて、北アジアと中央アジアが別立てにされてしまったことが、20世紀後半の我が国の内陸アジア史学界に混乱を招く大きな原因となったのです。モンゴルを北アジアに入れば、当然ながら中央アジアからモンゴルをはじき出されてしまいます。中央アジア史をどう捉えるか、中央アジア史の世界史的意義はどこにあるかという大きな問題と、それと表裏一体である中央アジアの定義をめぐって、さまざまな意見の食い違いが生まれる不幸の要因は、そこにあったと私は考えます。そもそも中央アジアと北アジアを分離してはいけなかったのです²。

しかし中央アジアと北アジアを分離するのではなく、ひとまとまりの歴史世界として捉える見方は、実は、第二次大戦前の日本に既にあったのです。それはまさしく本学会の創設者である松田壽男であり、「乾燥アジア」の名のもとに北アジアと中央アジアを一括してとらえ、その歴史を共通の特徴を持つ一貫したものとして叙述していたのです。一方、海外では戦後になってフランスからアメリカ合衆国に教授職を得て移住したハンガリー人の D. Sinor サイナーが 1950 年代から「中央

2 さらに旧ソ連時代からのロシア語論著における2種類の中央アジアという用語の存在が混乱に拍車をかけ、その影響は2005年に平凡社から出された『中央ユーラシアを知る事典』の「中央アジア」の定義にさえ残っている。また現在の新聞・出版界では、旧ソ連領中央アジア諸国のみを中央アジアとみなし、新疆ウイグル自治区もチベットも中央アジアではないという印象を与える記事が一般的である。それは現中国政府を喜ばせはするが、歴史学・地理学の常識からは逸脱している。同僚の荒川正晴教授によると、新疆ウイグル自治区のトゥルファン文書を引用して中央アジア史の講演をした時、聴衆から新疆は中央アジアではありませんと言われて唖然とした経験があるという。いずれにせよ今や「中央アジア」の使い方はあまりに拡散しており、もはや使い勝手が悪くなっている。一方、「北アジア」は定義さえすれば使ってよいと思うが、今後は「学習指導要領」にもある「内陸アジア」を前面に出していきたい。

ユーラシア」という術語・概念を使用し始めると³、ネーミングの魅力もあってそれが国際的に認められてきました。特に我が国では 1980 年代から 1990 年代にかけて次々に出版された概説書によって、その名称と概念が浸透していきました⁴。そして遂に 2000 年には、山川出版社の世界各国史シリーズの 1 冊として、小松久男（編）『中央ユーラシア史』が登場するのです（その分担執筆者には梅村坦・林俊雄・堀川徹・中見立夫・小松久男が含まれる）。これによって、山川各国史から中央アジアと北アジアは消えました。本書には以前の『北アジア史』に入っていた高句麗・渤海・女真・満洲のみならず契丹さえも切り捨てられているという問題点はあるものの⁵、これで我が国の東洋史学界と教育現場の両方において、めでたく、中央ユーラシアという術語が完全に定着するように思われました。

ところがそういう機運の中で、小松久男氏が代表となり、梅村・堀川両氏も補佐となって編集された『中央ユーラシアを知る事典』（平凡社、2005）を初めて拝見した時、私は仰天しました。本書では、そのタイトルとは裏腹にモンゴルとチベットが事実上無視されていたからです。この事典の「中央ユーラシア」の定義は小松担当（pp. 346-347）ですが、そこには内外モンゴルもチベットも満洲も含まれていません。ただし後で伺ったところでは、その理由は商業ベース上の問題で、学問的な主張ではないということでしたので、やや安堵しました。さらに、小松・梅村両氏が中央ユーラシアの東端を大興安嶺として、モンゴルやチベットを含めて考えていることは、他の両氏の著作より明かです。しかし、世界史を担当する高校教員への影響力を考えると、このようなネーミングはいただけません。せっかく中央ユーラシアという術語が市民権を得てきた段階でそうしたのでは、教育現場が混乱します。

それはさておき、中央ユーラシアという術語の提唱者であるサイナー自身は、中央ユーラシア Central Eurasia と内陸アジア Inner Asia とをほぼ同義語として使うようになり、現在にいたっています⁶。なぜそうなったのか興味もあったし、本日の講演にも必要でしたので詳しく調べてみたところ

3 D. Sinor, "Central Eurasia." in D. Sinor (ed.), *Orientalism and History*, 1954, 2nd edition, 1970. (D. Sinor, *Inner Asia and its Contacts with Medieval Europe*, London, 1977 所収のものは第 2 版の再録) ; D. Sinor, *Inner Asia. A Syllabus*, Bloomington 1969; D. Sinor, "Inner Asia -- Central Eurasia." *Indo Asia*, Heft 3, 1974, pp. 214-222; D. Sinor, *The Cambridge History of Early Inner Asia*, Cambridge &c.: Cambridge University Press, 1990.

4 護雅夫『草原とオアシスの人々』（人間の世界歴史 7）、三省堂、1984, pp. 13-30；山田信夫『草原とオアシス』（ビジュアル版世界の歴史 10）、講談社、1985, pp. 247, 248；護雅夫／岡田英弘（共編）『中央ユーラシアの世界』（民族の世界史 4）、山川出版社、1990, pp. i-ii, 4-8；岡田英弘『世界史の誕生』筑摩書房、1992, p. 259；杉山正明『遊牧民から見た世界史』日本経済新聞社、1997, pp. 9-13, 37-75；杉山正明「中央ユーラシアの歴史構図」、杉山正明（編）『中央ユーラシアの統合』（新版岩波講座世界歴史 11）1997, pp. 3-89；伊原弘／梅村坦（共著）『宋と中央ユーラシア』（世界の歴史 7）、中央公論社、1997, p. 252；梅村坦『内陸アジア史の展開』（世界史リブレット 11）、山川出版社、1997, pp. 1-6.

5 もし万一、契丹（遼）の歴史は中国史に含まれると考えて『中央ユーラシア史』より意図的に省いたとしたら、それは以下の本稿でも述べるように、重大な認識不足である。

6 Cf. D. Sinor, *Introduction à l'étude de l'Eurasie Centrale*, Wiesbaden 1963; D. Sinor, *Inner Asia. A Syllabus*,

ろ、その理由は聞いてあきれるほどバカバカしいものでした。まず、サイナーが「中央ユーラシア」という術語を初めて考え出したのはまだフランスにいた 1940 年でしたが、文字にして発表したのは 1954 年からです。次いで 1963 年に有名なフランス語の『中央ユーラシア学入門』*Introduction à l'étude de l'Eurasie Centrale* (実質は文献解題) が出版されました。彼自身はウラル語族とアルタイ語族の言語と歴史の専門家であるため、それら両語族の歴史的活動範囲のすべてを「中央ユーラシア」に含めたかったらしく、そこには北極海に至るまでのシベリア全体と、西では東北ヨーロッパまで、東では満洲まで含まれることになりました。ところがアメリカ合衆国に行ってみると、研究資金獲得のための申請書類にいくら「中央ユーラシア」という聞き慣れない言葉を使っても、審査で落とされ続けたので、インディアナ大学の同僚にも親しみやすく、一般的な理解も得やすい「内陸アジア」を使ったところ、ようやく多額の資金獲得に成功したそうです⁷。従って、本人は「中央ユーラシア」の方が正確であると思っているにもかかわらず、「内陸アジア」を多用するようになって、現在に至っているのです。そういう次第なので、彼は「中央ユーラシア」と「内陸アジア」をほとんど同義語として使うようになりました⁸。また、「中央ユーラシア」という歴史世界に東ヨーロッパも含めるのですが、そこは内陸アジアに起源を持つ遊牧民集団が移動して行ったところなのだから、そこまで内陸アジアとして拡大解釈してよからう、と主張するのです。

さらに驚くべきことに彼は、「中央ユーラシア史は野蛮人の歴史である」⁹とか、「中央ユーラシアは地理的概念ではなく文化的概念であり、南方の定住農耕文明圏が拡大すると収縮する」¹⁰と述べています。これはまさしく西欧中心史観や中華主義史観に代表される農耕文明中心史観であって、とても我々には受け入れられません。また逆に、「セルジュークが小アジアを占領したり、契丹・女真・モンゴル・満洲族が北中国を占領したりすると、そこは内陸アジアになる（つまり内陸アジアが拡大する）」¹¹とも言っています。さらに、サイナーの中央ユーラシアにはシベリアどころか極北のツンドラ地帯まで含む一方、チベットを含めたり含めなかったりと揺れ動くだけでなく、本人はもうすっかり中央ユーラシアより内陸アジアという用語の方にシフトしています。それゆえ我々はもはや中央ユーラシアの定義について、サイナーの考えを斟酌する必要はまったくなく、共有されうる概念として新たに再定義すべきなのです。学問領域においても名称の付け方＝ネーミングは大事で、それによって発展する度合いが違ってきます。

ところで、拙著『シルクロードと唐帝国』では中央ユーラシアを、大興安嶺からハンガリーのカルパチア山脈あたりまでの乾燥した地帯、草原と沙漠とオアシスが優越する地域とし、当然ながらモンゴルとチベットも含むとしたのですが、それでは渤海や女真や清朝の勃興の舞台であった満洲

Bloomington 1969, p. x & p. 5; D. Sinor (ed.), *The Cambridge History of Early Inner Asia*, 1990, p. 6, map.

7 以上は、主に “Inner Asia – Central Eurasia,” pp. 214-215 による。

8 *Inner Asia*, 1969, p. x & p. 5; *The Cambridge History*, 1990, p. 6, map.

9 *Inner Asia*, 1969, p. 5: “The history of Central Eurasia is a history of the barbarian.”

10 *Inner Asia*, 1969, p. 7.

11 *The Cambridge History of Early Inner Asia*, 1990, p. 3.

を含まないので宜しくないという指摘を、古畑徹教授より受けました¹²。渤海史の専門家である古畑氏にしてみれば、かつて渤海を「中央ユーラシア型国家」（旧い用語で「征服王朝」）の先駆と見なした森安自身が、中央ユーラシアの東端を大興安嶺として満洲を落としてしまったのは納得いかないというわけです。この批判は、私だけに対するものではなく、21世紀に入ってから『史学雑誌』の「回顧と展望」で渤海が「内陸アジア」の項で無視され続けたという学界状況に対するものでした。松田壽男の「乾燥アジア」史論、護雅夫の概説書名『草原とオアシスの人々』、山田信夫の概説書名『草原とオアシス』などが典型的ですが、我々は無自覚に内陸アジアとか中央ユーラシアを「草原とオアシス」に代表される地域としてしまっていたようなのです。これは大きな盲点でした。それゆえ我々は中央ユーラシアないし内陸アジアという用語について、もう一度考え直す必要があるのです。

Ⅲ. 「中央ユーラシア」の再定義

私は世界史を、次のようにおおまかに時代区分しています。

世界史の8段階（森安孝夫『シルクロードと唐帝国』2007, pp. 84-85 を微修正）

- ① 農業革命（第一次農業革命）・・・・・・約11000年前より
- ② 四大文明の登場（第二次農業革命）・・・・・・約5500年前より
- ③ 鉄器革命（遅れて第三次農業革命）・・・・・・約4000年前より
- ④ 騎馬遊牧民（遊牧騎馬民族）の登場・・・・・・約3000年前より
- ⑤ 中央ユーラシア型国家優勢時代¹³・・・・・・約1000年前より

トルコ＝モンゴル系の遊牧民を中核とする軍事国家がユーラシア世界史の檣舞台に登場

- ⑥ 火薬革命と海路によるグローバル化・・・・・・約500年前より
「陸と騎射」の時代から「海と火炮」の時代への転換
- ⑦ 産業革命と鉄道・蒸気船（外燃機関）の登場・・・・約200年前より
- ⑧ 自動車と航空機（内燃機関）の登場・・・・・・約100年前より

ここでは、その賛否は問題ではありません。注目していただきたいのは、グローバル世界史になる前の①から⑤までのユーラシア世界史において、舞台をユーラシア大陸の北半分と南半分に分けるという見方の導入です。①で農業がメソポタミアの北部辺りで発明されたのも、恐らくはそこからの伝播によって②のいわゆる「四大文明」¹⁴に代表される大農耕文明が起こったのも（その担い手

12 古畑徹「日本の渤海史研究について」『日本学』第28輯、東国大学校日本学研究所、2009, (pp. 7-38), p. 27.

13 当日のコメンテーターである桃木至朗教授からは、この第⑤項だけ「国家」の「優勢」という別の基準を持ち込むのは論理的におかしく、せめて「中央ユーラシア型国家によるユーラシア世界の大統合」というふうにするべきであろうとの指摘があった。一方で、私のやり方に違和感はないという意見もある。

14 「四大文明」というのは、第二次世界大戦後に日本でそれまでの西洋史と東洋史を統合した高校「世界史」

には印欧語族もアルタイ語族もない), ③鉄器発明以後 1500 年もたった頃, 鉄製農具 (とくにスキ先) の普及により, 農耕地が拡大してアケメネス朝ペルシア・ローマ帝国・マウリヤ朝・秦漢帝国のような大領域国家が生まれるのも, すべてユーラシアの南半分です。それに対して馬の原産地であり, 馬が家畜化され, 馬車戦車が発明され, その後④のように騎馬技術が発展して遊牧騎馬文化が生まれ, ユーラシア世界史の動向を左右する遊牧国家 (ほとんどが印欧語族ないしアルタイ語族が主体となって建国) が生まれたのはすべて北半分なのです。もちろん, ⑤の中央ユーラシア型国家の故郷もすべて北半分です。要するに, ユーラシア南半分は暖かく豊かな水に支えられて生産力が高い農耕文明世界であるのに対し, ユーラシア北半分は寒冷で乾燥して生産力が低く, 水利も悪いため農業が伝播しても「面」での農業ができず, 牧畜・遊牧文明が優勢であった世界なのです。西欧中心史観と中華主義史観では, この北半分を「野蛮」と言ってきたのですが, その地域の歴史と言語の専門家であるサイナーまでもが同じことを言っているのは, 呆れるばかりです。しかし, ここにお集まりの皆さんには最早そのような偏見はないでしょう。

私はこれまでに発表された多種多様の中央ユーラシアの定義をチェックしてみましたが, 一長一短がありました。そこで今, それらをすべて踏まえつつ, さらに妹尾達彦教授の提唱してきた農業 = 遊牧境界地帯 (私のいう農牧接壌地帯) の概念 (図版 1)¹⁵ を取り込み, 「中央ユーラシア (地域世界, 文明圏)」を次のように定義したいと思います。すなわち, 中央ユーラシアとは, 農牧接壌地帯を相当広い幅のある境界としてユーラシアを南北に区分した時の北側であり, そこからユーラシア最北部のツンドラ地帯とシベリア～沿海州の大森林地帯 (高級毛皮をシルクロードに提供する森林の純粋狩猟民の活動範囲) をおおまかに除いたものです。ただし, 森林地帯でも内部に牧畜や農業のできる草原や可耕地を比較的広範囲に擁する地域は含みます。そうすれば, 中央ユーラシアにユーラシア北辺 (北ユーラシア) を含むというサイナー説の不自然さは緩和されるでしょう。その結果として中央ユーラシアは, 「ユーラシアのうちで草原と沙漠とオアシスの優越する乾燥地帯であり, 住民としては遊牧民とオアシス農耕民・都市民を主とし, 森林草原地帯の半牧畜半狩猟民や半農半狩猟民を従とする地域世界である。そこに満洲と東ヨーロッパのかんりの部分やチベット高原全体は含まれるが, 西アジアの大部分は含まれず¹⁶, また秦嶺・淮河線以北の北中国でも関中盆地や中

が生まれた時に, 西欧中心史観であるユーロセントリズムを打破する目的で江上波夫によって作り出された概念である。そのことは最近, 村井淳志『『四大文明』は江上波夫氏が発案した造語だった!』(明治図書発行『社会科教育』46 巻 4 号, 2009 年 4 月号, pp. 116-121) によって指摘されたが, その後, 私は畏友の杉山正明・京大教授より, かつて江上波夫先生と面談した時に直接御本人からそのことを伺った, と教えられた。近年の高校教育界では, いわゆる文化相対主義の台頭により, これら 4 つを特別視するのはおかしいとして, 「四大文明」という用語が教科書から消えつつあるが, それは逆にユーロセントリズムに与するだけであり, 真に残念なことである。

15 もちろん妹尾氏の農業 = 遊牧境界地帯の位置設定にも, 細部ではまだ問題があると思われる。

16 農牧接壌地帯そのものの定義の仕方にもまだ改善の余地はあり, 私自身は, ホラサン地方北部 (イラン東北部) ～カスピ海南縁部～コーカサス南麓～小アジア北部を含める方向で考えている。

原や河北平原等の大農耕地帯は含まれない」と規定されることになります。これで、中央ユーラシアの範囲は、サイナー説や杉山正明説¹⁷よりかなり狭くなります。

我々も、中央ユーラシアをリジッドな地理的概念ではなく文化的概念として捉える点ではサイナーに賛同するのですが、それが時代に応じて自在に伸縮すると考えるものではありません。サイナーは、野蛮な遊牧民が文明化すると中央ユーラシアが小さくなると見なしているのですが、これはまさしく中華主義者がやたらと「漢化」という概念を振り回すのと同じような偏見です。我々はむしろ、各文明圏ないし各地域世界が境界地域では初めから重なり合っていると考えるのです。もちろん、その上での伸縮は認めます。地域世界という文化的概念は、生業・生活形態や歴史的背景などに基づくもので、確かに歴史の流れや自然環境の変動に影響されますが、むしろ一つの地域が両属できると考えるのです。例えば北中国の農牧接壌地帯や内モンゴル、満洲などは「中央ユーラシア世界」と「東アジア世界」の両方に属することになります¹⁸。

今後は、できれば中央ユーラシアを以上のように広い意味で使用し、内陸アジアは、そこから東ヨーロッパの該当部分をカットした地域名称として使ってはいかがでしょうか。逆に内陸アジアより狭い中央ユーラシアなどありえません。そうすれば、内陸アジア史学会が、満洲・モンゴル・東西トルキスタン・チベットの研究者のみならず、東アジア（特に北中国と朝鮮半島）、インド西北部、イラン北部の研究者をも包摂して、互いに接点を見出せることでしょう。以後、本講演では中央ユーラシア史と言ったり内陸アジア史と言ったりしますが、ウラル山脈以東に関しては同義語と思ってください。

近現代世界では、国境というものががちりとガードされるようになりますから、モンゴルや満洲は東アジアなのか北アジアなのかという議論が出てきますが、国境がアバウトないしボーダーレスであった前近代においては、そもそも陸続きの地域を厳密に分けること自体が無意味なのであり、従って国民国家の単位で国策に奉仕するような世界史を描くべきではなく、国家を越えて地域世界全体や人類史全体を俯瞰するような世界史の構築に向かうべきなのです。これはその地域を現に支配している諸国家では無理な仕事で、われわれ第三者である日本人にこそできる仕事なのです。

IV. 前近代中央ユーラシア史の世界史的意義

前近代中央ユーラシア史の世界史的意義は、なんといっても馬の家畜化と騎馬遊牧民（遊牧騎馬民族）の出現、そして周囲の大農耕文明圏をつなぐ交通路であり、さらに文明交流の場として機能

17 杉山正明『遊牧民から見た世界史——民族も国境も越えて——』日本経済新聞社、1997、pp. 9-13, 37-75.

18 最近ようやく盛んになりつつある「北方からみた日本史」という見方に深く関わる沿海州や満洲東部は、本稿での中央ユーラシアの定義からははずれるが、中央ユーラシアに含まれる満洲西部とは一体で捉えられるべき存在であり、日本は朝鮮半島のみならず沿海州～満洲東部を介して中央ユーラシアと繋がっている。

【補注】脱稿後に、菊池俊彦（編）『北東アジアの歴史と文化』（札幌、北海道大学出版会、2010年12月刊）が出版された。本稿第Ⅴ章の第六の柱のみならず、本稿全体とも関わるので追補しておく。

したシルクロードの存在にあります。世界史における騎馬遊牧民の重要性についてはもはや自明のことですから、ここで繰り返す必要はないでしょう。一方、シルクロードの評価をめぐるのは、御承知の通りのシルクロード史観論争¹⁹がありますが、私は前近代におけるその重要性を疑う余地はないと信じています。ただし、この点を論争当事者である私がいくら主張しても、反対意見を持つ方々には納得してもらえないでしょうから、海外の状況に目を向けることにします。

実はソ連崩壊による旧ソ連領中央アジア諸国の独立と、モンゴル・中国の改革開放政策などによって現地調査が容易になったという時代背景を受けて、1992年に、それまで内陸アジア関係学会の存在しなかったオーストラリアに *Australasian Society for Inner Asian Studies* という学会が誕生しました。オーストラリアには内陸アジア関係の研究者が少なかったため、歴史・考古・宗教・現代政治などの枠を越えて関係者を組織したそうです。そこから、いわば新しいシルクロード学が形成される機運が生まれてきました。オーストラリアは欧米から離れているために、西欧中心主義とは無縁の世界史、すなわち中央ユーラシアを東西南北の文化交流の場、あらゆる技術や知識や思想が周辺の大農耕文明圏から流れ込み、混じり合っって新しいものが生まれてくる場として重視する世界史が、強く意識されることになったようです。彼らは「内陸アジア *Inner Asia* = シルクロード世界 *Worlds of the Silk Roads*」と定義し、シルクロードはあくまで雅称であって、そこには高級商品のみならず、仏教・キリスト教・マニ教・イスラム教のような世界宗教、さらには病原菌・貨幣・料理・服装から官称号まで、ありとあらゆる文化・文物が流通したのであり、その歴史をまじめに捉えることは、ユーラシア史の根元に横たわっている統一性を見ることである、と述べています²⁰。彼らの「シルクロード世界」という用語は、拙著『シルクロードと唐帝国』で述べたようにシルクロードを線ではなく面で捉える私の考えとも合致します。

一方、たまたま同じ時期に動き出したユネスコの新しいシルクロード研究プロジェクト (UNESCO's major project on the *Integral Study of the Silk Roads*) の活動、さらには文化交流の舞台であったシルクロードを象徴するにふさわしい折衷主義的宗教たるマニ教の文献をあらゆる言語に亘って集成しようという企画 *Corpus Fontium Manichaeorum* (これは先のユネスコによるシルクロード研究のサブ=プロジェクトと認定された)、これら2つの流れとオーストラリアの内陸アジア研究者の活動とがリンク (中核メンバーはオーバーラップ) することとなり、このわずか数十年の間に、*Silk Road Studies* (これは1997年から刊行) と題する立派な学術書のシリーズが既に16冊²¹、

19 Cf. 森安孝夫「序文——シルクロード史観論争の回顧と展望——」、森安孝夫編『中央アジア出土文物論叢』京都、朋友書店、2004、pp. i-vii. なおシルクロード史観をめぐるのは、拙著『シルクロードと唐帝国』を批判した間野英二「『シルクロード史観』再考——森安孝夫氏の批判に関連して」(『史林』91-2, 2008, pp. 116-136) という文章があるが、私はそれに対して学問的に再反論する必要を認めない(その理由は『唐代史研究』11, 2008, p. 174 にて一言した)。敢えて言えば、本稿全体がその反論になっていよう。さらに間野批評に対する客観的なコメントとして、齋藤勝氏による拙著書評(『唐代史研究』11, pp. 93-94)も参照されたい。

20 David Christian, *Introduction to the Worlds of the Silk Roads: Ancient and Modern*, (*Silk Road Studies* 2), 1998, pp. i-v.

21 主要なものを列挙する。© D. Christian / C. Benjamin (eds.), *Worlds of the Silk Roads: Ancient and Modern*, (*Silk*

ユネスコ編の中央アジア文明史シリーズ *The History of Civilizations of Central Asia series* の 7 巻すべて、そして大部のマニ教基礎文献集成シリーズが続々と出版されました。

以上のような動きの中心にいるオーストラリアとアメリカ合衆国の *generalist* ないし *historian* たちによるシルクロードの再評価は極めて高いもので、この私から見ても少々行き過ぎではないかと思うぐらいですが、要するに「世界システム」は近代西欧が生み出したものでも 13 世紀のモンゴルが生み出したものでもなく、シルクロードとして知られるネットワークに依拠するユーラシア世界システムが、既に紀元前 2 千年紀からあったのだと主張しています²²。つまり、オアシスのシルクロードよりもむしろ草原のシルクロードに注目しているのであり、その時代から既にユーラシア南半分の農耕世界と北半分の牧畜世界は密接に交流して全体が一体化（システム化）していたというのです。

彼らの主張には行き過ぎもあって、全てに従えるわけではありませんが、後で一言触れるように、私は彼らとは別の「前近代世界システム論」という着想を持っていますので、大枠には大賛成です。中央ユーラシアでは、遅くとも紀元前 2 千年紀までには、かなり統一的な文明が発展していたのは事実であります²³。そして、そこに騎馬技術の発明が加わって、そのうちの西寄りのものが紀元前 1 千年紀にスキタイ文化の基盤になり、東寄りのものが匈奴文化として発展していったのでしょう。従来の高校世界史教科書にみられた「スキタイ文明が東漸して匈奴文明」になったという記述は誤りです（本大会の林俊雄報告参照）。これも一種のユーロセントリズムです。また、たとえギリシアとインドと中国で似たような神話があっても、それは片方から別の方へ伝播したと単純に見なすのではなく、周囲から中央ユーラシアに流入した諸要素がそこで融合し、それが再び逆流した可能性もあると考えるべきなのです。いずれにせよ、前近代ユーラシア史の人類史への貢献として、草原地帯と沙漠オアシス地帯にまたがるシルクロードの果たした役割を強調することに、疑念を差し挟む必要は全くありません²⁴。

Road Studies 2), Turnhout: Brepols, 1998. © D. Christian / C. Benjamin (eds.), *Realms of the Silk Roads: Ancient and Modern*. (Silk Road Studies 4), Turnhout: Brepols, 2000. © A. L. Juliano / J. A. Lerner (eds.), *Nomads, Traders and Holy Men along China's Silk Road*. (Silk Road Studies 7), Turnhout: Brepols, 2002. © K. Parry (ed.), *Art, Architecture and Religion along the Silk Roads*. (Silk Road Studies 12), Turnhout: Brepols, 2008.

22 Cf. A. G. Frank, "A Theoretical Introduction to 5,000 Years of World System History." *Review* 13, 1990, pp. 155-248; A. G. Frank / B. K. Gills (eds.), *The World System: From Five Hundred Years to Five Thousand Years*, London / New York, 1992; D. Christian, "Inner Eurasia as a Unit of World History." *Journal of World History* 5-2, 1994, pp. 173-211; A. G. Frank, *Reorient: Global Economy in the Asian Age*, Berkeley: University of California Press, 1998; David Christian, "Silk Roads or Steppe Roads? The Silk Roads in World History." in D. Christian / C. Benjamin (eds.), *Realms of the Silk Roads: Ancient and Modern*. (Silk Road Studies 4), 2000, pp. 67-94.

23 Cf. Christian, "Inner Eurasia as a Unit of World History," pp. 178-179: Seima-Turbino phenomenon of the mid-second millennium B.C.E.

24 なお、私が大阪大学 21 世紀 COE の一環として同僚の桃木至朗教授と協力して初めて開催した全国高等学校世界史教員研修会は、その後の高大連携の歴史研究会の嚆矢となったもので、その報告書である森安孝夫（編）

今夏の阪大の大会に参加されたある高校の先生は、私の講義を聴いて、「張騫がシルクロードを開拓したことにより、ユーラシア世界が統一されたという意識は、私の中にも恥ずかしながらあったので、この地域を教える際には十二分に意識しなければいけないと実感した」という感想を寄せられました。

なお、シルクロードという概念を使って、初学者に前近代世界史を包括的に理解させる試みはアメリカ合衆国でも行なわれているようで、J. M. Moore / R. W. Wendelken (eds.), *Teaching the Silk Road: A Guide for College Teachers*. (Albany: State University of New York Press, 2010) という最新刊の第1章の副題は“Using the Silk Roads to Organize World History Surveys before 1500”となっています。ただし、そこでは私の「世界史の8段階」の②「四大文明の登場」に対応する箇所には、地中海文明が加わって五大文明になっています。いかにも欧米的です。その他、違いも少なくないのですが、高校～大学教養課程で教えるべき世界史の構想について、目指す方向は一致していると思います。

V. 最近の前近代中央ユーラシア東部の歴史研究の目玉

私は本学会の機関誌である『内陸アジア史研究』の節目となる第10号と第25号に特別寄稿を掲載していただきましたが、15年前の第10号に発表したのが、

森安孝夫「日本における内陸アジア史並びに東西交渉史研究の歩み——イスラム化以前を中心に——」『内陸アジア史研究』10, 1995 / 3, pp. 1-26

です。これは、明治以来の我が国の内陸アジア史研究の大きな流れと15年前の状況を、初学者にも分かりやすいようにまとめたもので、今もその価値を失っていないと自負しております。それゆえその内容と引用文献は前稿にゆずり、ここでは前稿執筆時点から後の顕著な動向を紹介します。ソ連崩壊と東西冷戦の終焉によって劇的に変わったのは、モンゴル国と旧ソ連領中央アジアと中国の新疆ウイグル自治区での現地調査が当たり前になったことと、中国・モンゴル国・アフガニスタンなどにおける新出史料の公開が大幅に進捗したことです。森安前稿では、まだその成果が反映される段階にいたっていませんでしたが、それ以後、続々と新しい成果が出てきたわけです。20世紀中葉までに知られた文書群、及びその後の20世紀第4四半世紀～21世紀に新たに出土した文書や大量の石刻史料は以下の通りです。後者は、前者のうち長らく未公開だったものと共に、順次公開されています。

20世紀中葉まで：

◎敦煌文書、トゥルファン文書、カラホト文書、ニヤ文書、楼蘭文書、クチャ文書、
コータン文書、ムグ文書

『シルクロードと世界史』（大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文科学」報告書3、豊中、大阪大学大学院文学研究科、2003）には、高校教員との質疑応答も掲載されており、今なお有益と思う。まだ残部があり、配布可能であるので、御希望の方は私まで連絡されたい。

20 世紀第 4 四半世紀～ 21 世紀の新出史料ないし新公開史料：

●中国国内における漢文石刻史料の大量出土

魏晉南北朝よりモンゴル帝国・元朝までの全ての時代に関係

『北京図書館蔵中国歴代石刻拓本匯編』『隋唐五代墓誌匯編』シリーズなど多数

cf. 氣賀澤保規（編）『新版 唐代墓誌所在総合目録（増訂版）』（2009）

●敦煌文書

『英蔵敦煌文獻』『法国国家図書館蔵敦煌西域文獻』『俄蔵敦煌文獻』

『国家図書館蔵敦煌遺書』シリーズなど

杏雨書屋本（旧羽田亨所蔵本）『敦煌秘笈』の公開開始

（大阪，武田科学振興財団，3 冊既刊，2009-2010，全 9 冊の予定）

●莫高窟北区出土の「もう一つの敦煌文書」の発見 cf. 森安孝夫・百濟康義・庄垣内正弘の論著

彭金章／王建軍／敦煌研究院（編）『敦煌莫高窟北区石窟』全 3 卷（北京，文物出版社，2000-2004）

●トゥルフアン文書ほか

1980 年代ベゼクリク出土文書・・・全体としては未公開

『高昌残影』& 『トルファン出土仏典の研究 高昌残影積録』（京都，法蔵館，1978-2005）

『大谷文書集成』全 4 卷（京都，法蔵館，1984-2010）

『イラン語断片集成 大谷探検隊収集・龍谷大学所蔵中央アジア出土イラン語資料』（後掲）

『中村不折旧蔵禹域墨書集成』全 3 卷（2005）

『斯坦因第三次中亜考古所獲漢文文獻』全 2 卷（上海辞書出版社，2005）

旅順博物館／龍谷大学（共編）『旅順博物館蔵新疆出土漢文仏教選粹』（京都，法蔵館，2006）

『新獲吐魯番出土文獻』全 2 卷（北京，中華書局，2008）

●コータン新出文書・木簡 cf. P. O. Skjærvø・熊本裕・段晴・榮新江などの論著

●カラホト文書 新たに公開が進む

『黒城出土文書（漢文文書巻）』『俄蔵黒水城文獻』『英蔵黒水城文獻』シリーズなど

吉田順一／チメドドルジ（編）『ハラホト出土モンゴル文書の研究』（東京，雄山閣，2008）

●バクトリア語文書・碑文 cf. N. Sims-Williams の多数の論著

●江南仏画中のマニ教絵画 cf. 吉田豊 in 『大和文華』119 (2009) & 121 (2010)

近年の日本における中央ユーラシア東部地域の歴史に関する研究で，特に世界的水準から見て目立っているのは，5～10 世紀頃のトルコ＝モンゴル系諸民族およびチベット系諸民族と，東方に移住したイラン系ソグド人の歴史であり，もう 1 つが 13～14 世紀のモンゴル時代史です。5 世紀とは拓跋部族連合を中核とする遊牧鮮卑族が北中国を統一して北魏を建国した時代であり，10 世紀とは，私が「世界史の 8 段階」で世界史上の一大画期として提唱する⑤「中央ユーラシア型国家

優勢時代」の幕開けと重なります。以下、紙幅の関係もあって、学界動向ないし研究史的なもの以外の専門論文は基本的に割愛し、索引・文献目録が充実し先行研究のレファランスとしての役割も果たす主要著書、並びにそれらの新潮流を平易に説く入門書を中心に、簡単に紹介しましょう²⁵。なお、一括して列挙はしませんが、山川出版社の世界史リブレットは、内陸アジア史の苦手な高校教員の方々には絶好のシリーズです。

●第一の柱：漢文石刻と多言語文書史料を活用した東方進出ソグド人研究と隋唐帝国の新しい見方

本稿末尾にある付録：分野別研究者リストのCの方々を中心

- ・ T. Moriyasu 森安孝夫, “Japanese Research on the History of the Sogdians along the Silk Road, Mainly from Sogdiana to China.” *Acta Asiatica* 94, 2008, pp. 1-39. *これは海外に日本の内陸アジア史の水準の高さをアピールするだけでなく、我々が欧米諸語で書かれた論著をほぼ把握していることと対比しながら、欧米側研究者が日本語の論著を咀嚼せずして世界のトップレベルに到達することは無理であると警告する目的で、分野を特定して執筆したものである。関係する論著を和英対訳で網羅的に列挙しているので、日本の研究者にも有益である。この英文による「ソグド研究史」に続いて、さらに日本語増補版を森安孝夫（編）『ソグドからウイグルへ』（汲古書院）に掲載予定。
- ・ 石見清裕「中国隋唐史研究とユーラシア史」工藤元男／李成市（共編）『アジア学のすすめ 3 アジア歴史・思想論』東京、弘文堂、2010, pp. 23-42. *初学者や高校教員に一読を勧めたい。
- ・ 荒川正晴『オアシス国家とキャラヴァン交易』（世界史リブレット 62）東京、山川出版社、2003.
- ・ 石見清裕『唐代の国際関係』（世界史リブレット 97）東京、山川出版社、2009.
- ・ 『NHK スペシャル文明の道 3 海と陸のシルクロード』東京、日本放送出版協会、2003.
- ・ 森安孝夫『シルクロードと唐帝国』（興亡の世界史 5）東京、講談社、2007.
- ・ 妹尾達彦『長安の都市計画』（講談社選書メチエ 223）、東京、講談社、2001.
- ・ 石見清裕『唐の北方問題と国際秩序』東京、汲古書院、1998.
- ・ 森部豊『ソグド人の東方活動と東ユーラシア世界の歴史的展開』（関西大学東西学術研究所研究叢刊 36）吹田、関西大学出版部、2010.
- ・ 荒川正晴『ユーラシアの交通・交易と唐帝国』名古屋、名古屋大学出版会、2010.

騎馬遊牧民（遊牧騎馬民族）が活躍したのは、決して中央ユーラシアを東西に貫く大草原地帯だけではなく、中央ユーラシアの南辺にある農牧接壌地帯もその活動舞台でありました。近年とくに

25 ただし、網羅性をめざしていないことは最初にお断りしておく。必要な場合は、末尾に掲げる「付録：モンゴル時代までの中央ユーラシア史関係分野別研究者リスト」により、インターネットで検索していただきたい。同一人に多数の著書がある場合は代表的なもののみ取り上げる。また、渤海史については、前注 12 に引用した古畑論文に加えて、古畑徹「戦後日本における渤海史の歴史枠組みに関する史学史的考察」『東北大学東洋史論集』9, 2003, pp. 215-245 があるので、それらを参照されたい。

我々が注目しているのは、シルクロード東部で最大の北中国の農牧接壌地帯です。そこは、漢民族とは農耕民・都市民であり漢民族こそが中国人であるとする立場からは、「辺境」というニュアンスを込めて「長城地帯」と呼ばれてきたところですが、漢民族の出自の半分は遊牧民であるとする我々の立場からは、ここは辺境どころかむしろ遊牧民と農耕民・都市民の交わる「接点」であり、中国史自体のダイナミズムをも生み出してきた最前線なのです。そしてそこ内モンゴル草原とを合わせた遊牧可能地帯に、匈奴・羌・羯・鮮卑・突厥・九姓鉄勒・沙陀・契苾・党項・吐谷渾・阻卜・奚・契丹などさまざまな騎馬遊牧民集団が興亡したことを見れば明らかなように、秦漢＝匈奴拮抗時代から五胡十六国時代を経て、北魏・隋唐・五代に至り、さらに遼・金・西夏・元朝へと続く中国史において、草原を本拠地とする遊牧民族は決して客人ではなく、農耕漢民族と並ぶもう一方の主人だったのです。

そういう次第で、第一の柱と表裏一体となるのが、次の領域です。

◎鮮卑・北朝史研究と吐蕃・西夏史研究と遼金史研究 分野別研究者リストのC, D, Eの方々を中心

- ・向井佑介「北魏の考古資料と鮮卑の漢化」『東洋史研究』68-3, 2009, pp. 128-140.
- ・三崎良章『五胡十六国——中国史上の民族大移動——』(東方選書 36) 東京, 東方書店, 2002.
- ・川本芳昭『中国史のなかの諸民族』(世界史リブレット 61) 東京, 山川出版社, 2004.
- ・川本芳昭『中華の崩壊と拡大 魏晉南北朝』(中国の歴史 5) 東京, 講談社, 2005.
- ・松下憲一『北魏胡族体制論』札幌, 北海道大学出版会, 2007.
- ・武内紹人「古チベット文献研究の現段階」『東洋史研究』67-4, 2009, pp. 123-129.
- ・大原良通『王権の確立と授受 唐・古代チベット帝国(吐蕃)・南詔国を中心として』(汲古叢書 54) 東京, 汲古書院, 2003.
- ・西田龍雄『西夏王国の言語と文化』東京, 岩波書店, 1997.
- ・荒川慎太郎／佐藤貴保(共編)「西夏関連研究文献目録 2002 年度版」『翰海蒼茫——ユーラシア歴史学の構築をめざして(オアシス地域研究会報 別冊)』京都, 総合地球環境学研究所オアシスプロジェクト研究会, 2003, pp. 5-79.
- ・井上充幸(編)「中国西北地域研究文献目録 2002 年度版」『翰海蒼茫』2003, pp. 80-115.
- ・森安孝夫／遠藤和男／宅見有子／佐藤貴保「遼・西夏」, 礪波護／岸本美緒／杉山正明(共編)『中国歴史研究入門』名古屋, 名古屋大学出版会, 2006, pp. 158-171, 408-411.
- ・飯山知保「遼金史研究」, 遠藤隆俊／平田茂樹／浅見洋二(共編)『日本宋史研究の現状と課題』東京, 汲古書院, 2010, pp. 347-379.
- ・島田正郎『契丹国 遊牧の民キタイの王朝』(東方選書 23) 東京, 東方書店, 1993.
- ・杉山正明『疾駆する草原の征服者 遼・西夏・金・元』(中国の歴史 8) 東京, 講談社, 2005.

- ・武田和哉（編）『草原の王朝・契丹国（遼朝）の遺跡と文物』東京、勉誠出版、2006.
- ・荒川慎太郎／高井康典行／渡辺健哉（共編）『遼金西夏研究の現在 (1) ～ (3)』府中、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2008 ～ 2010.

近年の鮮卑・北朝史、西夏史、遼金史、及び東方ソグド人やソグド系トルコ人の動向についての研究者たちによる学問的功績は、農牧接壤地帯という北中国の大きな地域が、中国史だけではなく内陸アジア史、あるいは中央ユーラシア東部史の舞台でもあることを明らかにした点にあります²⁶。第一の柱に戻りますと、功績はそれにとどまりません。すなわちソグド人やソグド系トルコ人は中央ユーラシア東部全域において、商人・武人・通訳から外交官・政治顧問・官僚として活躍し、北方のトルコ＝モンゴル語世界と南方の漢語世界の両方を密接に結びつける重要な役割を担った主役的存在（単なる触媒以上のもの）であって、決して外来の客人ではなかったことまで明らかにしたのです。外来の客人としか見ない古い考えのままでいると、例えば、ソグド本国のソグド人を論じなくて東方に進出したソグド人ばかりを論ずるのは旧来の東西交渉史観だ、などという的外れな批判が出てくるのです。

また大唐帝国といえ中華王朝の黄金時代であり、典型的な漢民族の国家であると考えられてきたのですが、実はその内部で軍事力の根幹をなしていたのは、決して府兵制や募兵制で集められた漢人農民兵などではなく²⁷、^{きび}羈縻府州として一括され、漢文史料からはほとんど無視されてきた膨大な数の騎馬遊牧民やソグド人などの集団だったのです。これまでの中国史でこの重大な点が見すごされてきたのは、彼らには各集団のリーダーを通じた委任統治をさせるほかはなく、それゆえ中央では実態を把握できず漢籍に情報が残らなかったからなのです。私が敦煌出土のチベット語文書を使って実証した、中国本土内部であるオルドスの突厥国^{ブクチョル}や河西回廊のホル国（ソグド人自治州）の存在（図版2参照）はそれをヴィジュアルに見せようとしたものでしたが、その後の石見清裕・荒川正晴・森部豊・山下将司らの高水準の研究はその内実に迫りつつあるのです。農民と遊牧民は統治の仕方が全く違うのであって、同じ地域に二重の行政単位があってもいいのです。私は中国に現地調査に行くまでは、同様のことが現代中国にもあることをまったく知りませんでした。しかし、実際には海拔や降水量の違いによる土地の性質の違いによって、同じ地域に別の生業を持つ集団が棲み分けている現象があちこちで見られるのです。

また私は高校世界史教育のあり方とも絡めて、300年続いた唐帝国の後半は、ウイグル・吐蕃などに圧迫されて領土は半減したこと、ウイグルと吐蕃の北庭争奪戦でウイグルが勝利したことこそが後のトルキスタンの成立に直結するのであり、タラス河畔（751年）の戦いなどより北庭争奪戦

26 伊原弘／梅村坦（共著）『宋と中央ユーラシア』（世界の歴史7）の再版（中央公論社、中公文庫、2008）の補遺 pp. 542-547 において、梅村氏は、農牧接壤地帯の研究の意義と新動向を紹介し、「中国史の一部はやはり中央ユーラシア史として描かれなければならない」と的確にまとめている。

27 ただし府兵制に取り込まれた定住胡人（非漢人）、特にソグド人の存在とその意義については、今後の大きな研究課題である。

（789-792 年）の方がよほど画期的であること、そしてその後の唐・ウイグル・吐蕃の「三国会盟」という事実に注目するように注意を喚起してきました。さらに最近では、平安時代に唐より日本に将来され、三井寺に残されていた漢字とチベット文字の東洋世界地図を紹介しました。そこでも明らかに唐・ウイグル・吐蕃が鼎立していたのです。（図版 3, 4 参照）

我々は北中国の大部分を、中国史だけではなく中央ユーラシア東部史の舞台に組み込んだわけですが、既にそのリアクションが宋代史側からありました。それが昨年出版された宋代史研究会（編）『「宋代中国」の相対化』（東京、汲古書院、2009）です。

●第二の柱：トルコ＝ルーン文字碑銘・ソグド語碑銘の新拓本将来と再解読の成果による遊牧国家研究の進展 分野別研究者リストの A の方々が中心

- ・森安孝夫／A. オチル（共編）『モンゴル国現存遺蹟・碑文調査研究報告』豊中、中央ユーラシア学研究会（大阪大学文学部内）、1999.
- ・大澤孝／鈴木宏節／ムンフトルガ（R. Munkhtulga）『ビチェースⅡ——モンゴル国現存遺蹟・突厥碑文調査報告——』（日本・モンゴル共同調査プロジェクト「ビチェースⅡ」報告書）、ウランバートル、2009.

この分野では最近、特に突厥と阿史那氏の名称に絡んで、吉田豊・大澤孝・鈴木宏節の活躍が目立ちます。ただし、それらも含め本分野の業績のほとんどは専門論文（上掲 2 書も現地調査日記を含む専門書）として発表されたものであり、敢えて高校教員向けに紹介できるものを探せば前掲の拙著『シルクロードと唐帝国』と松川節『図説モンゴル歴史紀行』（東京、河出書房新社、1998）の関連部分でしょうか。ルーン文字トルコ語碑文を原文から読める者としては、大澤・鈴木のほかには森安孝夫・林俊雄・片山章雄・松井太・白玉冬・齊藤茂雄・田村健らがいます。

●第三の柱：漢文と多言語文書史料の読解によるオアシス都市・国家ないし社会の研究（これと関連して仏教史・マニ教史の研究）の進展

分野別研究者リストの B の方々が中心；そこに H・I・J の方々が加わる

オアシス都市・国家研究の中核は、トゥルファン盆地内の諸オアシスに関する高昌国時代～唐代前期の出土漢文文書による研究と、敦煌・コータンの吐蕃支配期～帰義軍期の漢文・チベット語・コータン語文書を使った研究ですが、両者は相互に密接に関連しています。この分野では恒常的に優れた論著が発表され続けています。ただ懸念材料は若手が育っていないという点です。さらに時代的には前後しますが、楼蘭とカラホトの研究があります。また、現在の日本で敦煌文書・トゥルファン文書・カラホト文書を使用した研究論文がよく掲載される学術雑誌としては、高田時雄の主宰する『敦煌写本研究年報』、關尾史郎の主宰する『西北出土文献研究』、森安孝夫・吉田豊・荒川正晴・P. ツィーメの主宰する『内陸アジア言語の研究』があります。

- ・荒川正晴「最近五年（1993～1998）日本の唐代学術研究概況－敦煌・吐魯番学－」『中国唐代学会会刊』9, 1998, pp. 181-198.
- ・池田温「近年の日本における敦煌・吐魯番研究」『シルクロード研究』2, 創価大学, 2000, pp. 67-90.
- ・D. Matsui 松井太, “Recent Situation and Research Trends of Old Uigur Studies.” *Asian Research Trends* (New Series) 4, 2009, pp. 37-59.
- ・西脇常記『ドイツ将来のトルファン漢語文書』京都, 京都大学学術出版会, 2002.
- ・關尾史郎『西域文書から見た中国史』（世界史リブレット 10）東京, 山川出版社, 1998.
- ・荒川正晴『オアシス国家とキャラヴァン交易』（世界史リブレット 62）東京, 山川出版社, 2003.
- ・池田温『敦煌文書の世界』名著刊行会, 2003.
- ・土肥義和（編）『敦煌・吐魯番出土漢文文書の新研究』東京, （財）東洋文庫, 2009.
- ・荒川正晴『ユーラシアの交通・交易と唐帝国』名古屋, 名古屋大学出版会, 2010.
- ・長澤和俊『楼蘭王国史の研究』東京, 雄山閣出版, 1996.
- ・富谷至（編著）『流沙出土の文字資料 楼蘭・尼雅出土文書を中心に』京都, 京都大学学術出版会, 2001.
- ・赤松明彦『楼蘭王国——ロプ・ノール湖畔の四千年——』（中公新書 1823）東京, 中央公論新社, 2005.
- ・井上充幸／加藤雄三／森谷一樹（共編）『オアシス地域史論叢——黒河流域 2000 年の点描——』京都, 松香堂, 2007.

上掲の土肥義和（編）『敦煌・吐魯番出土漢文文書の新研究』は（財）東洋文庫の研究部・内陸アジア研究部門・中央アジア研究班の成果であると謳っていますが、実際には中国史の論文といふべきものが少なくありません。前述の通り、北中国史と内陸アジア史が一体化しているわけですが、本書はその状況を如実に示しています。

前近代の出土文献史料は、漢文石刻以外はほとんどが断片です。従って欠落部分を推測しながら読まねばなりません。そのために文献学の素養が重要になります。漢文文書研究は我が国では池田温先生という大御所を筆頭に中堅・若手まで分厚い研究者層を誇っていますが、漢文は日本人研究者であればほぼ全員が扱えますので、漢文以外の言語を原文書から解読でき、最近 20 年間に業績のある研究者を以下に列举します。先ほど、うかうかしていると敦煌学・トゥルファン学はいずれ中国に追い抜かれてしまうという危惧を述べましたが、我々日本人研究者には、漢文のみならず多言語の現地語を扱える点と英独仏露等の文献を活用できる点で一日の長があります。もちろん 1 人で多くはできませんから、ハイレベルで親密な研究者グループ作りが大事です。特に若い方々はその点を強く意識し、大学の枠を越えた連携をしていってください。

ソグド文献学：吉田豊

コータン文献学：熊本裕

トカラ文献学：井ノ口泰淳，玉井達士，荻原裕敏

ウイグル文献学：小田壽典，庄垣内正弘，百済康義（物故），梅村坦，森安孝夫，松川節，松井太，
橘堂晃一，笠井幸代，中村健太郎ほか

チベット文献学：山口瑞鳳，今枝由郎，武内紹人，大原良通，石川巖，岩尾一史，坂尻彰宏，
赤木崇敏，西田愛ほか（仏教史ではなく仏教学に特化した研究者は割愛）

西夏文献学：西田龍雄，松澤博，荒川慎太郎，佐藤貴保ほか

モンゴル文献学：小澤重男，庄垣内正弘，橋本勝，樋口康一，栗林均，松川節ほか

ここに列挙した研究者に関わる主な専門書や論文集は以下の通りです。もちろん実際にはこれ以外に多数の論文があります。歴史に関わるもので特に目立つのは，パミール以東で出土したソグド語・コータン語世俗文書の解説・研究を進めた吉田豊と，草書体ウイグル語の行政命令文書を解説して新分野を開いた松井太の業績です。吉田豊は言語学者ですが，上記の「第二の柱」に関するソグド語碑銘の解説ともども，歴史学に多大の貢献をしてくれています。

- ・ 百済康義／W. ズンダーマン／吉田豊『イラン語断片集成 大谷探検隊収集・龍谷大学所蔵中央アジア出土イラン語資料』（龍谷大学善本叢書 17），全 2 巻，京都，法蔵館，1997.
- ・ 吉田豊『コータン出土 8-9 世紀のコータン語世俗文書に関する覚え書き』（神戸市外国語大学研究叢書 38）神戸市外国語大学，2006.
- ・ Ts. Takeuchi 武内紹人，*Old Tibetan Contracts from Central Asia*. Tokyo, Daizō-shuppan, 1995.
- ・ 庄垣内正弘『ウイグル文アビダルマ論書の文献学的研究』京都，松香堂，2008.
- ・ Y. Kasai 笠井幸代，*Die uigurischen buddhistischen Kolophone*. (Berliner Turfantexte 26), Turnhout (Belgium), Brepols, 2008.
- ・ 小田壽典『仏説天地八陽神呪経一卷 トルコ語訳の研究』全 2 巻，京都，法蔵館，2010.
- ・ 森安孝夫（編）『シルクロードと世界史』（大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」報告書 3）豊中，大阪大学大学院文学研究科，2003.
- ・ 森安孝夫（編）『中央アジア出土文物論叢』京都，朋友書店，2004.
- ・ 白井聡子／庄垣内正弘（共編）『中央アジア古文献の言語学的・文献学的研究』京都，京都大学文学部言語学研究室，2006.
- ・ T. Moriyasu, *Die Geschichte des uigurischen Manichäismus an der Seidenstraße. ---Forschungen zu manichäischen Quellen und ihrem geschichtlichen Hintergrund---*. (Studies in Oriental Religions 50), Wiesbaden: Harrassowitz Verlag, 2004. (原版：森安孝夫『ウイグル＝マニ教史の研究』『大阪大学文学部紀要』31/32 合併号全冊，1991 年)

- ・ T. Irisawa 入澤崇 (ed.), *"The Way of Buddha" 2003: The 100th Anniversary of the Otani Mission and the 50th of the Research Society for Central Asian Cultures*. Kyoto, Ryukoku University, 2010.
- ・ 奈良康明／石井公成 (共編) 『文明・文化の交差点』 (新アジア仏教史 5 中央アジア) 東京, 佼成出版社, 2010.

●第四の柱：モンゴル時代史研究 (モンゴリアと北中国の農牧接壤地帯のみならず中央ユーラシア全域から南中国にまで及ぶ) 分野別研究者リストの G の方々が中心

この分野では今や漢文のみでは駄目であり, モンゴル語・チベット語・ウイグル語・ペルシア語等の史料も取り込んで研究が進められています。もちろん漢文史料についても深みが格段に増えています。本分野での研究状況は, 少し前までならば次の文献目録の冒頭に掲げる 3 編を見ていただければいいのですが, それ以後のものも多数ありますので, 研究者リストの G に列挙された名前で, インターネット検索をかけていただくほかありません。

- ・ 杉山正明 「モンゴル時代史研究の現状と課題」, 『宋元時代史の基本問題』 東京, 汲古書院, 1996, pp. 497-528.
- ・ 杉山正明 「モンゴル時代史の研究——過去・現在・将来——」, 杉山正明 『世界史を変貌させたモンゴル』 東京, 角川書店, 2000, pp. 147-226.
- ・ 櫻井智美 「日本における最近の元代史研究」 『中国史学』 12, 2002, pp. 123-145.
- ・ 岡田英弘 『世界史の誕生』 (ちくまライブラリー 73) 東京, 筑摩書房, 1992. (再刊: ちくま文庫, 1999).
- ・ 杉山正明 『クビライの挑戦』 (朝日選書 525) 東京, 朝日新聞社, 1995.
- ・ 杉山正明 『遊牧民から見た世界史——民族も国境も越えて——』 東京, 日本経済新聞社, 1997.
- ・ 岡田英弘 『モンゴル帝国の興亡』 (ちくま選書 314) 東京, 筑摩書房, 2001.
- ・ 杉山正明 『モンゴル帝国と大元ウルス』 (東洋史研究叢刊 65) 京都, 京都大学学術出版会, 2004.
- ・ 志茂碩敏 『モンゴル帝国史研究序説』 東京, 東京大学出版会, 1995 年.
- ・ 高橋文治 (編) 『烏臺筆補の研究』 東京, 汲古書院, 2007.
- ・ 宮紀子 『モンゴル時代の出版文化』 名古屋, 名古屋大学出版会, 2007.
- ・ 宮紀子 『モンゴル帝国が生んだ世界図』 東京, 日本経済新聞出版社, 2007.
- ・ 杉山正明 『モンゴル帝国と長いその後』 (興亡の世界史 9) 東京, 講談社, 2008.
- ・ 白石典之 (編) 『チンギス・カン戒め——モンゴル草原と地球環境問題——』 東京, 同成社, 2010.
- ・ 窪田順平 (編), 小野浩／杉山正明／宮紀子 (共著) 『ユーラシア中央域の歴史構図 13 ～ 15 世紀の東西』 京都, 総合地球環境学研究所イリプロジェクト, 2010.
- ・ 岡田英弘 『モンゴル帝国から大清帝国へ』 東京, 藤原書店, 2010.

注目すべきは、日本におけるモンゴル時代史研究の進展が世界史の新しい見方に直結している点です。モンゴル時代を到達点とする、それまでの内陸アジア史学の存在意義は、松田壽男・江上波夫以来、護雅夫・岡田英弘を経て、杉山正明をはじめとする我々の世代が主張してきたところで明らかです。しかしながら我々は、前近代内陸アジア史が、従来の西欧中心史観や中華主義史観に取って代わるべきであると自己主張しているわけではありません。振り子を反対側に戻すためにやや大げさに言っていますが、眼目は内陸アジア史を世界史の必要不可欠の構成要素として認定し、そのように扱って下さいと要求しているだけです。つまり高校世界史教育において内陸アジア史を端折ってはいけないし、端折っては一貫した世界史叙述は不可能だと言っているのです。くれぐれもそこを誤解しないでください。

岡田英弘に続く我が国のモンゴル学のリーダー的存在である杉山正明は、これまでの論著の中でも、東の遼王朝すなわち第一次キタイ帝国と、西のカラキタイすなわち第二次キタイ帝国との連続性を繰り返し主張してきましたが、最新刊の『ユーラシア中央域の歴史構図 13～15世紀の東西』では新たにラシード＝アッディーン『集史』からの一節を引用し、モンゴル時代の同時代人がカラキタイは耶律阿保機から始まると認識していたという明らかな証拠を示しています。そして「そもそも歴史に、東アジアも中央アジアもありはしない。（中略）20世紀になって勝手に創作した枠組みで、歴史を眺めることのおかしさをあらためて思わざるをえない」とか、「近現代的な図式の照り返しという二重の誤解で語られる“東アジア史上の国際秩序”云々は、しばしば心のなかの中華主義の表出」であるなどと、相変わらずの挑発的発言をしております²⁸。彼の見方は、私が第一の柱として取り上げた隋唐帝国の新しい見方とも通じるものです。

●第五の柱：西トルキスタンのクシャン・エフタルの動向とトルコ化の問題（ソグドは既に上で言及済み） 分野別研究者リストのFの方々を中心

この分野については稲葉穰氏に委任いたします。ここでの活躍が目立つのは小谷仲男・桑山正進という2人の先学の外に、同世代の田辺勝美・宮治昭という美術史畑の2人です。その次に稲葉氏自身が続きます。

- ・小谷仲男『大月氏 中央アジアに謎の民族を尋ねて』（東方選書 34）東京、東方書店、1999。（新装版：東方選書 38, 2010.）
- ・小谷仲男『ガンダーラ美術とクシャン王朝』（東洋史研究叢刊 51）京都、同朋舎出版、1996.
- ・Sh. Kuwayama 桑山正進, *Across the Hindukush of the First Millennium*. Kyoto, Institute for Research in Humanities, Kyoto University, 2002.

28 ただし桃木教授によれば、「中華主義」云々は少数の専門家の間での話であり、日本の若者の多数が「中国嫌い」である現在、こうした発言が行きすぎると逆手に取られ悪用される恐れがあるので、細心の注意をしてほしいと言う。

●第六の柱：現地調査の進展による考古学的視野の拡大

この分野については多くを林俊雄氏に、一部は稲葉穰氏に委任いたします。ただ、高校教員への推薦書のみ列挙します。いわゆるスキタイの3要素（馬具・武器・動物文様）が中央ユーラシアを東（モンゴル高原～中国北部）から西（北カフカス～黒海北岸）へ伝播したことについては、高浜秀・川又正智・林俊雄・雪嶋宏一らを中心とする草原考古研究会のメンバーが、1970年代以来の旧ソ連の考古学者による主張を踏まえて、より一層明らかにしたのです。林俊雄の概説は考古学のみならず文献にも基づいており、高校教員が遊牧文明の概略をつかむには役立ちます²⁹。また、モンゴル時代の考古学では白石典之の活躍が顕著です。

- ・川又正智『ウマ駆ける古代アジア』（講談社選書メチエ 11）東京、講談社、1994.
- ・林俊雄『スキタイと匈奴 遊牧の文明』（興亡の世界史 2）東京、講談社、2007.
- ・林俊雄『遊牧国家の誕生』（世界史リブレット 98）東京、山川出版社、2009.
- ・白石典之『チンギス＝カンの考古学』（世界の考古学 19）東京、同成社、2001.

なお、天山南路～チベット高原、さらに日本との関係で今後ますます注目されねばならない沿海州～満洲の考古学については、紙数制限のため林・稲葉両氏の報告に割愛されたものがあるようですので、ここで補足しておきます。

- ・日中共同ダングンウイリク遺跡学術調査隊（編）『日中共同丹丹烏里克遺跡学術調査報告書』京都、佛教大学、2007.
- ・シルクロード学研究センター（編）『トルファン地域と出土絹織物』（シルクロード学研究 Vol.8）奈良、（財）なら・シルクロード博記念国際交流財団／シルクロード学研究センター、2000.
- ・シルクロード学研究センター（編）『中国・青海省におけるシルクロードの研究』（シルクロード学研究 Vol.14）奈良、（財）なら・シルクロード博記念国際交流財団／シルクロード学研究センター、2002.
- ・菊池俊彦『北東アジア古代文化の研究』札幌、北海道大学図書刊行会、1995.
- ・天野哲也／臼杵勲／菊池俊彦（共編）『北方世界の交流と変容——中世の北東アジアと日本列島——』東京、山川出版社、2006.
- ・菊池俊彦／中村和之（共編）『中世の北東アジアとアイヌ——奴児干永寧寺碑文とアイヌの北方世界——』東京、高志書院、2008.

29 林『スキタイと匈奴』に先行して匈奴について論じた次の2点も、遊牧文明を知るために推奨できる。沢田勲『匈奴 古代遊牧国家の興亡』（東方選書 31）東京、東方書店、1996；加藤謙一『匈奴「帝国」』東京、第一書房、1998.

VI. 新しい世界史教科書作りと教育現場への提言

今夏の阪大主催の大会後に、ある高校教員から、「授業で一番教えるのが嫌なのが西アジアから中央アジアです。これは自分の中で整理できないからです」という御意見をいただきましたが、同様の発言は他にいくつもありました。一方、長野県の小川幸司教諭からは、今夏の大会を準備するための月例会後に次のようなコメントがありました。

中央ユーラシア史を「歴史教育」の場に伝えるということは、中央ユーラシアの「地域史」を教えるだけでなく、中央ユーラシアという視点から「世界史」を構想することにほかなりません。それゆえ、中央ユーラシア史を「地域」として構想する場合、それはたえず周囲のオーバーラップする領域を視野に入れることになるでしょうし、時代区分を考えると「世界史的な時代区分」への提言になるわけです。そこに中央ユーラシア史を「歴史教育」で重視する意義があります。これまでの定住型の文明・王朝だけでは見えてこなかった歴史のダイナミズムが明らかになるのです。

まさにその通りで、先に挙げた私の「世界史の 8 段階」は 2007 年の拙著の中で発表したものですが、既にその時、同じことを意識していました。もちろん、私の時代区分が唯一絶対だなどと自惚れてはいませんし³⁰、既に本日のコメンテーターである桃木至朗教授からさえ批判をいただいております（脚注 13 参照）。今後も修正していかなければならないでしょうが、前近代中央ユーラシア史が、国家の枠を越えた広い（地域世界的ないし人類史的な）立場から再構成される世界史にとって絶対不可欠であることを示すという眼目が変わることはありません。この点を踏まえた上で、私から今後の内陸アジア史学の存在意義を主張する方向性を 4 つ示したいと思います。

第 1）現行の世界史における西欧中心主義からの脱却：

残念ながら人間の歴史は、軍事力中心で動いてきました。現在でさえ国連常任理事国とは、合法的に核兵器所有を許されている軍事大国であることを思い出してください。公の歴史はいつも「勝てば官軍、負ければ賊軍」の歴史であって、最後に勝ったものに都合のよいように叙述される傾向があるのです。ですから、コーカソイドの西欧列強が鉄砲・大砲という新しい武器を持って世界に乗り出し、新大陸でモンゴロイドの原住民を大量虐殺し、黒人奴隷貿易でニグロイドの文明の栄えたアフリカを破壊しつつし、さらにモンゴロイドとコーカソイドの混じるアジアを植民地支配しても、自分たちは正義であると書き、その一方で、モンゴルに代表されるような、火薬革命以前に強大な軍事力を持っていた遊牧騎馬民族は野蛮な悪魔の集団であったかのような記述がなされるのです。それは遊牧騎馬軍団が最終的に、近代的な武器である鉄砲・大砲に負けたからです。もち

30 例えば、③はむしろ「金属器使用の大発展」とすべきとか、④と⑤の間で「約 2600 年前より」として「精神革命と大帝国の登場」という項目を設けるという考え方もあろう。

ろんこれは敢えて極端に言っているのですが、ダーウインの進化論は、たとえ本人がそう思っていなかったとしても実際には、西欧人や白人が最も優れていたから最後に生き残ったという見方、逆に黒人は劣っていたから組織的に奴隷にされ、アジアも半分劣っていたから植民地になるところが多かったのであり、それは歴史の必然であるとする見方を助長したのです。

ある進学校の優秀な高校教諭が、生徒たちを引きつけるために、西洋史という学問は、なぜ西欧列強が世界各地を植民地にするほど発展したかを探る目的であるのに対し、東洋史は、かつて非常に優れていた中国やインドや西アジアがなぜ停滞して西欧列強に支配されたのかという原因を探るものだ³¹、と教えているのを知った時、私は愕然としました。大学で東洋史を専攻して以来四十数年、そんなふう考えたことなど一度たりともなかったからです。負け組である東洋の歴史をやる、ましてその中でも近代には最も遅れたとされる内陸アジアの歴史をやる現代的な意味は一体どこにあると、我々は主張できるのでしょうか？私の答えは既に述べた通りです。皆さんはどうお考えになるでしょうか。

第2) 西欧中心史観と表裏一体の近代中心主義からの脱却：

世界史教育は現代に直結する近代史中心でやればよいとしてしまうと、必然的に欧米中心になってしまいます。ある高校教員は、「帝国主義の時代に西欧列強が植民地争奪を達成することで、生徒たちはどうしても《強いヨーロッパ、弱いアジア》といった図式で世界史を理解してしまう」と述べています。

卑近な例ですが、今や世界中の人間が着ている洋服の起源が内陸アジアの遊牧民であることとか、日本のカタカナ・ひらがなの起源が漢字であることなどは、近代史だけ習ったのでは分からないのです。もちろん、ユダヤ人差別やパレスチナ問題だって、近代史だけでは理解できません。古代史からやらなければ、人種差別も含め、人類のありとあらゆる差別はなくなりません³²。

以上のような前近代史や中央ユーラシア史を学ぶ意義に関する我々の主張は、今年8月の阪大主催の大会でも多くの高校教員から共感を得ました。複数の高校教員からは、中央ユーラシアのハイブリッドな社会を歴史的に学ぶことは、世界史理解のあり方を大きく変えていくのみならず、いまや在日韓国人に加えてさまざまなルーツを持つ生徒が急激に増えている高校現場、さらには今後の日本社会のあり方を考える上でも多くの示唆を与えてくれるのではないか、というコメントがありました。

31 ただしコメンテーターの桃木教授によれば、それは一面の真理であるという。

32 もちろん桃木教授が言われたように、高校の授業で古代～中世史に時間を取られすぎて近現代史がおろそかになるというのでは駄目である。近現代史が詳しくなるのは当然であるが、中央ユーラシア史に限らず前近代史の重要性を認識し、中央ユーラシアの前近代史は苦手だからといって高校の授業で勝手に端折ってしまうようなことがないようにとの忠告である。

第 3）中華主義史観からの脱却：

清朝の領域は「中国史」であると信じ込まされている者が、中国人はもちろん、この日本でさえ多数派になっているようです。農牧接壤地帯は中国史プロパーの領域ではなく、内陸アジア史の一部であり、ウイグルもチベットもモンゴルも漢民族と並置される偉大な文化を持った大民族です。次に引用する滋賀県の別所浩司教諭の意見は、今夏の阪大での大会で配布した私のレジュメの図版（地図）に関するものです。つまりその地図を高校生に見せれば、中華主義的見方は簡単に打破されるというわけです。

安史の乱以降、唐の求心力が急速に衰退したことは、今まで生徒に対しても伝えてこれで十分と思っていました。ところがレジュメの図版「吐蕃の最大版図」（森安注：本稿の図版 3「唐・吐蕃・ウイグル三国会盟」）を見て驚きました。吐蕃やウイグルどころか唐すら知っているのかあやしい生徒に対して、ダラダラ説明するよりもこの図を見せれば、一目瞭然であるということを感じられました。授業で使用している資料集には、確かに「8 世紀の世界」という見開き 2 ページで唐や吐蕃、ウイグルの勢力図がしるされているのですが、そこにはラサダけがぼつんと目につく吐蕃の勢力範囲は、長安からかなり離れたところになっています。

また高校世界史教科書からオルホン碑文（突厥碑文）と唐蕃会盟碑が消えて久しい反面、大秦景教流行中国碑だけは根強く残っていますが、後者は西欧中心史観の残滓の典型です。中央ユーラシアの民族が持った最初の独自の文字は突厥・ウイグルのルーン文字と吐蕃のチベット文字であるのに、それを教科書から抹消したのは、「少数民族」（この表現自体が漢民族中心の中華主義です）の歴史的意義を故意に過小評価しようとしている現中国政府におもねったからなののでしょうか。世界的な意義を考慮すれば、これらを端折ることは許されません。

第 4）イスラム中心主義からの脱却：

歴史学は近代史中心でやればよいという見方に立つと、内陸アジアの多くの地域ではイスラム中心主義になってしまいます。これも「勝てば官軍」の類になるのですが、中央アジアと東南アジアではイスラム化が進んだ（イスラム教徒が勝利者となった）ため、その起源をどうしても古くまで遡らせようという意図が、原史料にも研究者の間にも見られるのです。

例えば宋・元・明代のイスラム関係漢文史料には、その実際の起源が宋代であるにもかかわらず、恣意的に唐代まで遡らせる傾向があります³³。今やソグド本土やソグド商人の研究で世界的に有名になったフランスのドラヴェシエールも、中央アジアに関わるイスラム史料はイスラム化を強調し、その時期を実際より早める傾向を持つと繰り返し指摘しています³⁴。海路でムスリムが大活躍する

33 これが回教は回鶻すなわちウイグルに由来するという真っ赤なウソの俗説が流布した背景である。実際には唐・五代のウイグルはマニ教、その後の宋元時代は仏教が中心であった。梅村坦・森安孝夫の各種論著参照。

34 Cf. E. De la Vaissière, *Samarcande et Samarra. Elites d'Asie Centrale dans l'Empire Abbasside*. (Studia Iranica, cahier 35), Paris, 2007, pp. 20-21. 一方、最初にイスラム化したトルコ系王朝として喧伝されるカラハン朝にさえ、マ

のは早く見ても9世紀からで、実際には10世紀から本格化したと私は思っていますが、概説書などでは9世紀を唐代と言い替えて、いかにも8世紀からそうなったかのような誤った印象を与えるものが少なくありません。また各社の用語集や世界史小辞典などでは、「オアシスの道」は「8世紀以降、ムスリム商人による海上交易が活発化したことにより衰退した」と説明していますが、これも大きな誤りです。私が集めた200点以上の中央アジア出土のウイグル文手紙文書はすべて10～14世紀のものです。ここに引用するのは、『学習指導要領解説』にさえ見られるイスラム中心主義を指摘した京都府の毛戸祐司教諭のコメントです。

『学習指導要領解説』では、海域及び陸上のネットワークはイスラーム都市を核としムスリム商人を中心とするとされており、13世紀のパクス＝モンゴリカの時代、陸上のネットワークで活躍したウイグル商人がムスリムではなかった事などは見失われている。トルコ化、イスラーム化が進むまでの中央ユーラシア世界では、敦煌文書からわかるようにさまざまな言語、文字が使われており、仏教、マニ教、キリスト教等のさまざまな宗教が信仰されていた。違いが対立を生む場合ももちろんあっただろうが、人々は多くの場合生業や宗教の壁を柔軟に乗り越え、複数の言語や文字を使い分けてコミュニケーションを広げていった。中央ユーラシアの人々がもつ生活や文化の面での多様性や柔軟性は、今の日本の高校生にぜひ教えられるべきである。

最後に、私から近代内陸アジア史、特に東西トルキスタンの専門家に伺いたいのは、自分たちの研究のどこを強調すれば、高校世界史教科書に必須事項として記述してもらえるのかという点です。そこを積極的に訴えてもらいたいのです。ロシア・清朝との関係を考えるなら、内陸アジア史抜きで中国史もロシア史もできるわけがないはずです。また「マホメット（ムハンマド）なくしてシャルルマーニュなし」というピレンヌ＝テーゼをさらに敷衍して、近代の西欧文明の形成にイスラム世界、特にオスマン朝が与えた影響は巨大であり、それ抜きに西欧近代文明などありえないとして、西欧中心主義の世界史教科書に書き換えを迫ってはいかがでしょうか。

さらに私は、ポスト＝モンゴルのティムール朝・サファヴィー朝・ムガル朝・オスマン帝国のみならずロシア帝国も含めて、陸から見たグローバル＝ヒストリーを確立していただきたいと願っています。それと海からのグローバル＝ヒストリーである近代世界システム論とが合体して初めて真の世界史ができあがるのだと思います。

ウォーラーステインの「近代世界システム論」を極めて乱暴に言えば、近代西欧勢力は南北アメリカ・アフリカからの収奪によって発展したということです。その裏付けは鉄砲・大砲による軍事力です。ならば、前近代において、ユーラシア北半分の遊牧勢力が騎馬軍団の軍事力に依拠して南半分から収奪して国家を維持・発展させた現象を、「前近代世界システム論」と名付けてはいかがでしょう。既に私はこの考えを、8月の大会で披露しましたので、その時の講演原稿から一部引用

ニ教勢力もキリスト教勢力も強固に残存していた事実については、前注24引用の森安孝夫（編）『シルクロードと世界史』pp. 84-96を参照。

しておきます。遊牧民だけを野蛮な略奪者だと決めつける西欧中心主義・中華主義の世界史は、もういい加減にやめてもらいたいものです。欧米人の場合には「収奪」という言葉を使う一方、中央ユーラシアの遊牧民については「略奪」という言葉を使って、読者に与える印象を変えるのも、これまた言葉のマジックによる一種のユーロセントリズムなのです。

森安講演「シルクロード成立後の北の遊牧国家、南の拓跋王朝、まとめた中央ユーラシア型国家」（大阪大学中之島センター，2010年8月10日）より引用：

そもそも国家とは収奪を正当化する手段（機構）です。遊牧国家が略奪的で、農耕国家や定住国家はそうではないというのはごまかしです。支配者と納税者（被支配者）が同一領域内にいる国家の場合、いかに支配者が国家経営のためにひどい収奪（搾取）をしても、それを後世の人や研究者は「略奪」的とは言いません。しかし農耕国家も遊牧国家も、共に民衆から収奪しているわけで、税役を強制的に吸い上げる点でも、その強制力の背景に軍事力ないし合法的暴力組織（軍隊、警察）がある点でも同じです。

遊牧国家による資源・威信財の獲得（収奪）の仕方には3つある：1つは歳幣（貢ぎ物）であり、2つはシルクロード貿易を担うオアシス都市国家などへの徴税（関税）であり、3つは直接の交易である。こうして獲得した資源・威信財の再分配システムが、遊牧国家を成り立たせていたのです。ここに直接的な略奪（家畜・人口を主対象とする略奪）は含まれないことにくれぐれも注意していただきたいのです。

高校における世界史離れという現実に立ち向かい、本当の意味で国際化やグローバリズムに対応できる日本人を作り出すため、我々は今後、大学の共通教育とか一般教養課程での世界史教育に活路を求めるべきです。研究者であっても、教育に手抜きは許されません。総合大学であれ単科大学であれ地方大学であれ、学生の潜在的なニーズは高いのです。1コマであれ、義務としていやいややるのではなく、積極的にやることによって、20～30年後には歴史学は役に立たないなどという言説が陰を潜めるようにしたいものです。

最後の最後に、入試の問題に一言触れます。多くの高校教員からは、畢竟、自分たちの権威は大学入試であり、重要性の根拠を入試問題に頼らざるをえないゆえ、歴史観のあるしっかりした出題をしてほしいという切実な声が届いています。ここに広島県の佐久間孝之教諭からの意見を紹介します。

この度のセンター試験変更は、東京大学・京都大学にとっては、日本史・世界史をしっかり学ばせるいい機会だと思っています。もちろん、高校教科書の内容は大きな問題があることは認識しています。しかし、大学入試は、歴史を学ぶ“積極的な理由”にはなります。また、受験指導をする立場からいえば、その入試問題の内容を通して、大学の先生方の「歴史観」や「入学までに学んでおいてほしいこと」などを伺い知ることができます。入試問題は、生徒（受験生）・高校教師がその大学を理解する上での重要な要素でもあったと考えます。大学案内などで、そ

の大学の優位性を強調されても、入試問題がいい加減であると、その大学のいい加減さが透けて見えてしまいます。また、歴史教科書の悪口をよく聞きます。(教科書会社を含む受験産業の悪口も。)細かいことばかり記述する、無駄な用語が多すぎる、などです。これは、大学側の姿勢も大きく影響しているはずです。いい加減な、暗記偏重の入試問題も、教科書を悪くする重要な一因です。大学の入試問題も、現場では大きな影響力をもっているのです。

要するに大学教員は、入試問題に真剣に取り組めということです。私立の総合大学の入試問題によく見られる些末な問題、用語集を肥大化させるだけの出題はやめてください。その一方で、大学入試問題の作成に携わる時には、少しでも内陸アジアに関わる問題を出すように、工夫や努力をしていただきたいのです。また別の教員から「大学入試の改革は高校教育に大きな影響を及ぼす。世界史・日本史の入試問題の改善に関する研究も必要」であり、今後の取り組みに期待したいという意見もありましたが、これは阪大だけでは手に余ります。どうか本会の会員が所属するそれぞれの大学で、積極的な取り組みを御願ひする次第です。前近代史ならば、世界史全体の動向に大きく関わった遊牧民族やシルクロードについて、おおまかに俯瞰する問題を出せばよいのです。そういう出題をする能力がないというのは、本当の意味で世界史を教えたことがないからです。今後は、世界史を教えられない内陸アジア史研究者など、どこからも必要とされなくなるでしょう。研究者を目指すならば、大学院の時代から広い視野をもって勉強していきましょう。

(もりやす たかお, 大阪大学大学院文学研究科)

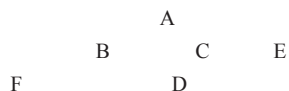
付録：モンゴル時代までの中央ユーラシア史関係分野別研究者リスト

本リストは以下の凡例に見るようにおおまかな分野別であるが、各分野ごとに内陸アジア史学会の会員を先にまとめ、非会員を後にする（下位分類の中ではほぼ年令順）。会員は二重アンダーラインで示すが、研究分野が複数にまたがる場合は、メインの分野を二重アンダーラインで、サブの分野を一重アンダーラインで示すことにする。リストアップの基準は次の通りである。

- 1) この20年間に著書のある人
 - 2) この20年間にメジャー学術誌に1本以上の論文がある人、メジャーではないが専門論文が2～3本はある人
 - 3) この20年間に注目すべき重要論文、ないし世界史教育に関する論著のある人
- *ただし、研究者が稀少な分野についてはこの限りではない。物故者については、森安孝夫「日本における内陸アジア史並びに東西交渉史研究の歩み」（『内陸アジア史研究』10, 1995, pp. 1-26）以後の方が活躍が顕著であった方のみにとどめる。

凡例：

A～Fは、およそ以下のような地域区分になる。Gがモンゴル時代史で、全領域を覆い、H～Kが、全時代・地域を通じた隣接分野の研究者である。同一人名が複数箇所に現れることも、少なくない。



- A. モンゴル帝国以前の漠北の遊牧民族史・・・モンゴル～天山北路の遊牧国家と構成民族（匈奴・柔然・突厥・九姓鉄勒・東ウイグル・キルギス・九姓韃靼など）
- B. 河西回廊～天山南路のオアシス地域史・・・敦煌・楼蘭・クチャ・コータン・高昌国・帰義軍政権・西ウイグル王国・カラハン朝など、中国の西域経営など；敦煌トゥルファン学はほぼここに含まれる
- C. モンゴル帝国以前の漠南の遊牧民族史（タングート・契丹は除く）・・・大興安嶺周辺～華北農牧接壌地帯～河西回廊の遊牧民中心（鮮卑をはじめとする五胡、吐谷渾・沙陀、東方移住ソグド人、漠南の突厥、甘州ウイグルなど）
- D. 吐蕃・タングート・西夏史
- E. 渤海・靺鞨・契丹・女真史
- F. 西トルキスタン～西進トルコ諸民族史・・・クシャン朝、キダーラ、エフタル、ハザル、ブルガール、オグズ・ガズナ朝、セルジューク朝など
- G. モンゴル時代史
- H. 中央ユーラシア美術史・文化史ほか
- I. 中央ユーラシア言語学・文学
- J. 中央アジア仏教学
- K. 中央ユーラシア考古学ほか

A. モンゴル帝国以前の漠北の遊牧民族史

長澤和俊, 内藤みどり, 沢田 勲, 森安孝夫, 林 俊雄, 片山章雄, 大澤 孝, 鈴木宏範, 齊藤茂雄,
加藤謙一, 松崎光久, 吉田 豊, 川崎浩孝, 菅沼愛語, 池田知正
中国史：吉本道雅

B. 河西回廊～天山南路のオアシス地域史・・・敦煌トゥルファン学はほぼここに含まれる

長澤和俊, 小田壽典, 梅村 坦, 森安孝夫, 石見清裕, 白須浄真, 關尾史郎, 荒川正晴, 町田隆吉, 片山章雄,
代田貴文, 宮崎純一, 山本光朗, 伊藤敏雄, 松井 太, 本間寛之, 岩本篤志, 坂尻彰宏, 市川良文, 赤木崇敏,
八木春樹, 熊本 裕, 吉田 豊, 蓮池利隆, 赤松明彦, 広中智之, 笠井幸代, 橘堂晃一, 室山留美子, 穴澤彰子
中国史: 古賀 登, 池田 温, 岡野 誠, 藤田高夫, 菊池英夫, 笠沙雅章, 土肥義和, 小田義久, 中村裕一,
氣賀澤保規, 妹尾達彦, 初山 明, 石田勇作, 富谷 至, 川村 康, 辻 正博, 大金富雄, 森谷一樹
日本史: 東野治之, 大津 透, 丸山裕美子

C. モンゴル帝国以前の漠南の遊牧民族史（タングート・契丹は除く）

長澤和俊, 松平喜美江, 森安孝夫, 石見清裕, 關尾史郎, 荒川正晴, 熊谷滋三, 山口 洋, 森部 豊, 斎藤達也,
岩本篤志, 山下将司, 平田陽一郎, 西村陽子, 鈴木宏節, 中田裕子, 福島 恵, 川本芳昭, 吉田 豊, 三崎良章,
佐川英治, 齋藤 勝, 勝畑冬実, 市来弘志, 兼平充明, 松下憲一, 前島佳孝, 村井恭子, 園田俊介, 室山留美子,
太田 稔, 菅沼愛語, 吉田 愛, 滝川正博, 藤野月子
中国史: 池田 温, 中田美絵, 窪添慶文, 佐藤智水, 原 宗子, 妹尾達彦, 長部悦弘, 会田大輔, 佐藤 賢
日本史: 山内晋次

D. 吐蕃・タングート・西夏史

森安孝夫, 太原良通, 石川 巖, 岩尾一史, 佐藤貴保, 山口瑞鳳, 今枝由郎, 岩崎 力, 鈴木隆一, 武内紹人,
松澤 博, 向本 健, 井内真帆, 小野裕子, 西田 愛, 大西啓司
日本史: 山内晋次

E. 渤海・靺鞨・契丹・女真史

菊池俊彦, 森安孝夫, 杉山正明, 白杵 勲, 宇野伸浩, 白石典之, 武田和哉, 高井康典行, 藤原崇人, 澤本光弘,
井黒 忍, 飯山知保, 毛利英介, 濱田耕策, 李 成市, 中村和之, 古畑 徹, 遠藤和男, 河上 洋, 古松崇志,
西尾尚也, 工藤寿晴, 赤羽目匡由
中国史: 笠沙雅章, 桂華淳祥, 徳永洋介, 松下道信, 塩 卓悟
日本史: 鈴木靖民, 石井正敏, 酒寄雅志, 小嶋芳孝, 上川通夫, 横内裕人, 榎本淳一, 簗島栄紀, 浜田久美子,
原 美和子, 廣瀬憲雄

F. 西トルキスタン～西進トルコ諸民族史

内藤みどり, 稲葉 穰, 小倉智史, 宮本亮一, 田村行生, 田村 健, 加藤九祚, 小谷仲男, 桑山正進,
山田明爾, 松田知彬, 家島彦一, 清水宏祐, 金原保夫, 入澤 崇, 吉田 豊, 井谷鋼造, 蓮池利隆, 城田 俊,
春田晴郎, 影山悦子, 西村淳一

G. モンゴル時代史

岡田英弘, 海老澤哲雄, 吉田順一, 原山 煌, 北川誠一, 森安孝夫, 松田孝一, 北村 高, 杉山正明, 小野 浩,
村岡 倫, 宇野伸浩, 川口琢司, 松川 節, 乙坂智子, 堤 一昭, 石濱裕美子, 白石典之, 中村 淳, 磯貝健一,
赤坂恒明, 松井 太, 矢島洋一, 森平雅彦, 四日市康博, 舩田善之, 牛根靖裕, 山本明志, 岡本和也, 高木小苗,

志茂碩敏，堀江雅明，中村和之，川本正知，古松崇志，中村健太郎，向 正樹，吉野正史

中国史（元朝史）：岡本敬二，大島立子，池内 功，森田憲司，矢澤知行，櫻井智美，市丸智子，小林隆道，
牧野修二，植松 正，太田弥一郎，高橋弘臣，片山共夫，沖田道成，渡辺健哉，水越 知，片桐 尚

中国文学：宮 紀子，高橋文治，金 文京

日本史：村井章介，佐伯弘次，榎本 涉

H. 中央ユーラシア美術史・文化史ほか

西林孝浩（美術史），田先千春（文化史，染織史），篠崎陽子（芸能史），楊 海英，藤井麻湖（以上は文化人類学），
田辺勝美，宮治 昭，中野照男，東山健吾，肥田路美，曾布川 寛，百橋明徳，臺信祐爾，石松日奈子，
八木春生，稲垣 肇，勝木言一郎，中川原育子，菊地（山崎）淑子，大西鷹希子，森 美智代，濱田瑞美，
北村 永，檜山智美（以上は美術史），田中公明（チベット仏教絵画），鶴田一雄（書道史），井本英一，前田耕作，
杉田英明，森 茂男，影山悦子（以上は文化史），横張和子，坂本和子，道明三保子，加藤定子（以上は染織・
服飾史），由水常雄，服部等作，谷一 尚（以上は工芸史），弓場紀知，町田吉隆（以上は陶磁史），山内和也，
津村眞輝子，服部直人（以上は古銭学），松原正毅，小長谷有紀（以上は文化人類学），相馬秀廣，安田順恵（以
上は地理学）（敦煌壁画のみを扱う美術史の方については網羅せず）

I. 中央ユーラシア言語学・文学

——会員はゼロであるが重要な隣接分野——

吉田 豊（ソグド語），熊本 裕（コータン語），武内紹人（チベット語），玉井達士，荻原裕敏（以上はトカラ語），
西田龍雄，荒川慎太郎，池田 巧，小高裕次，高橋まり代，中嶋幹起（以上は西夏語），武内康則（契丹語），
愛新覺羅烏拉熙春（契丹語・女真語），庄垣内正弘（ウイグル語・モンゴル語），小澤重男，橋本 勝，樋口康一，
栗林 均（以上はモンゴル語），高田時雄，玄 幸子（以上は漢語史），西脇常記，川崎ミチコ，張 娜麗，伊
藤美重子，荒見泰史，山本孝子（以上は敦煌・トゥルファン漢文文書）

J. 中央アジア仏教学

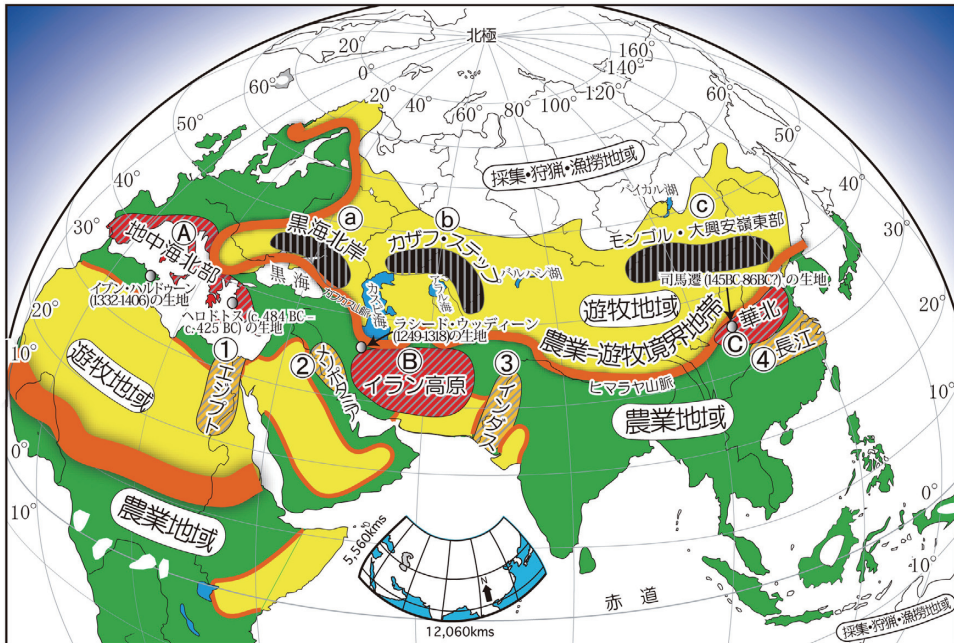
岩松浅去，井ノ口泰淳，上山大峻，定方 晟，古泉圓順，臼田淳三，湯山 明，沖本克己，百濟康義（物故；
ウイグル仏教），中谷英明，榎本文雄，入澤 崇，松田和信，辛嶋静志，山部能宣，伊吹 敦，三谷真澄

（中央アジア・チベット・敦煌仏教の教学研究中心の方は網羅せず；B～Iの項と重複する方は省略）

K. 中央ユーラシア考古学ほか

——会員に限定；会員以外の多数の研究者については，林俊雄報告を参照——

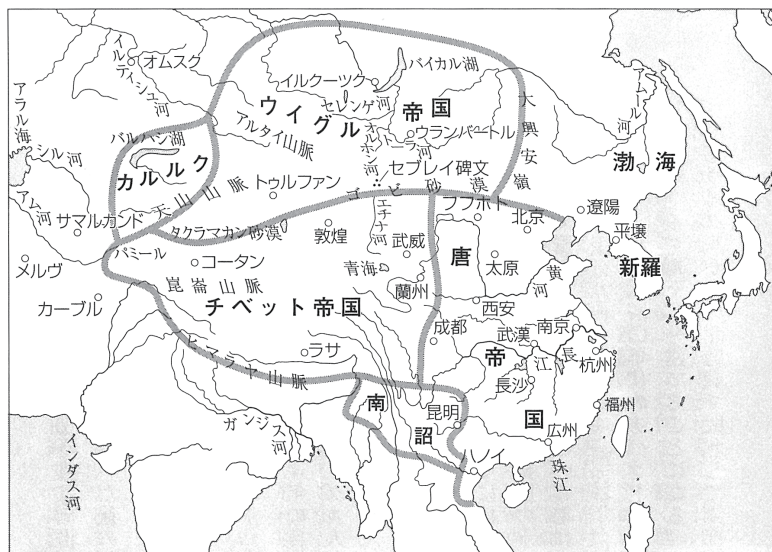
小島康登，川又正智，雪嶋宏一，白石典之，菊池俊彦，林 俊雄，臼杵 勲



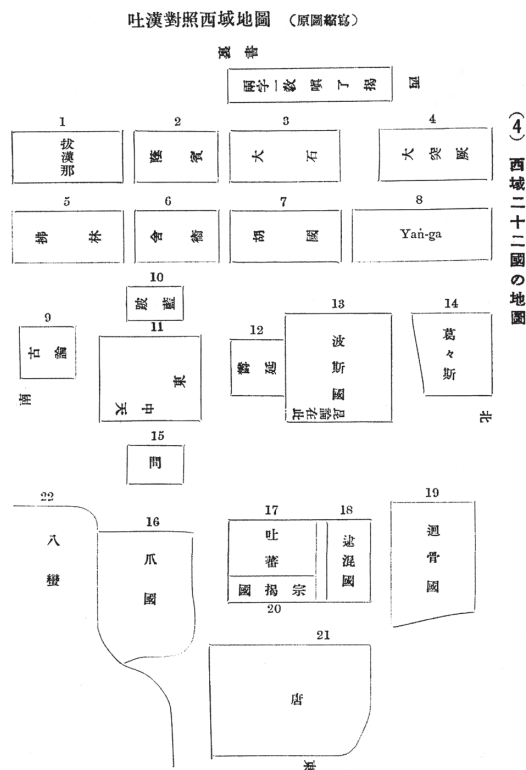
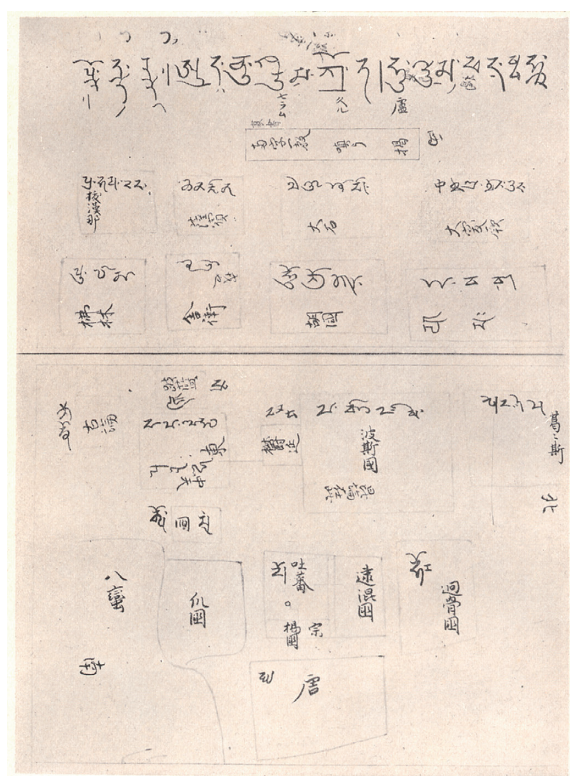
図版 1：農業＝遊牧境界地帯（2009 年発行の関根康正編『ストリートの人類学』下巻，国立民族学博物館調査報告 No.81 に掲載された妹尾達彦論文「北京の小さな橋」の図 3 を妹尾本人が微修正）



図版 2：敦煌出土チベット語文書によるソグド人使者の報告（森安孝夫『シルクロードと唐帝国』 pp. 328-329）



図版 3：唐・吐蕃・ウイグル三国会盟（森安孝夫『シルクロードと唐帝国』p. 353）



図版 4：蕃漢對照東洋地図（森安孝夫「唐代における胡と仏教の世界地理」『東洋史研究』66-3, 2007, pp. 10-11）